

宮園A遺跡1

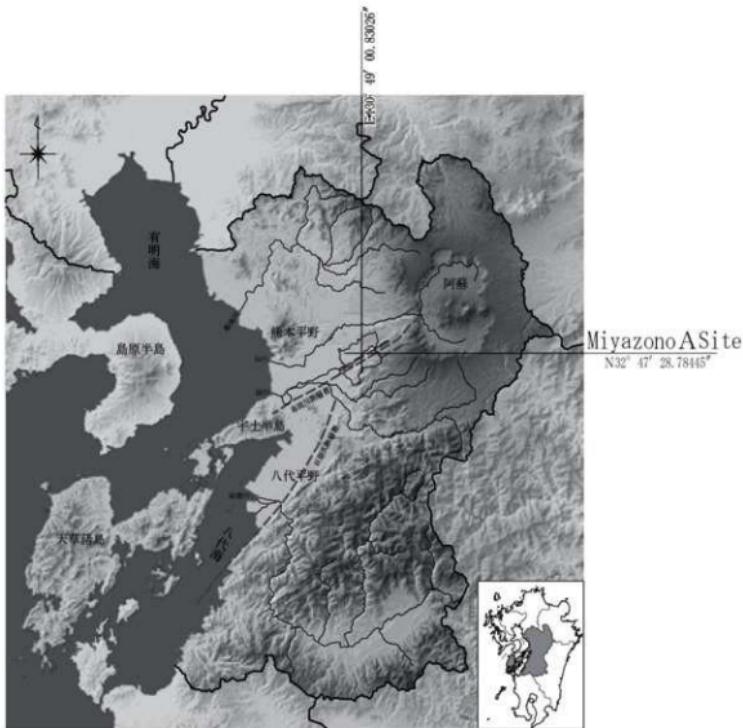
—益城町中央被災市街地復興地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2021

熊本県教育委員会

宮園A遺跡 1

—益城中央被災市街地復興土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—



2021

熊本県教育委員会



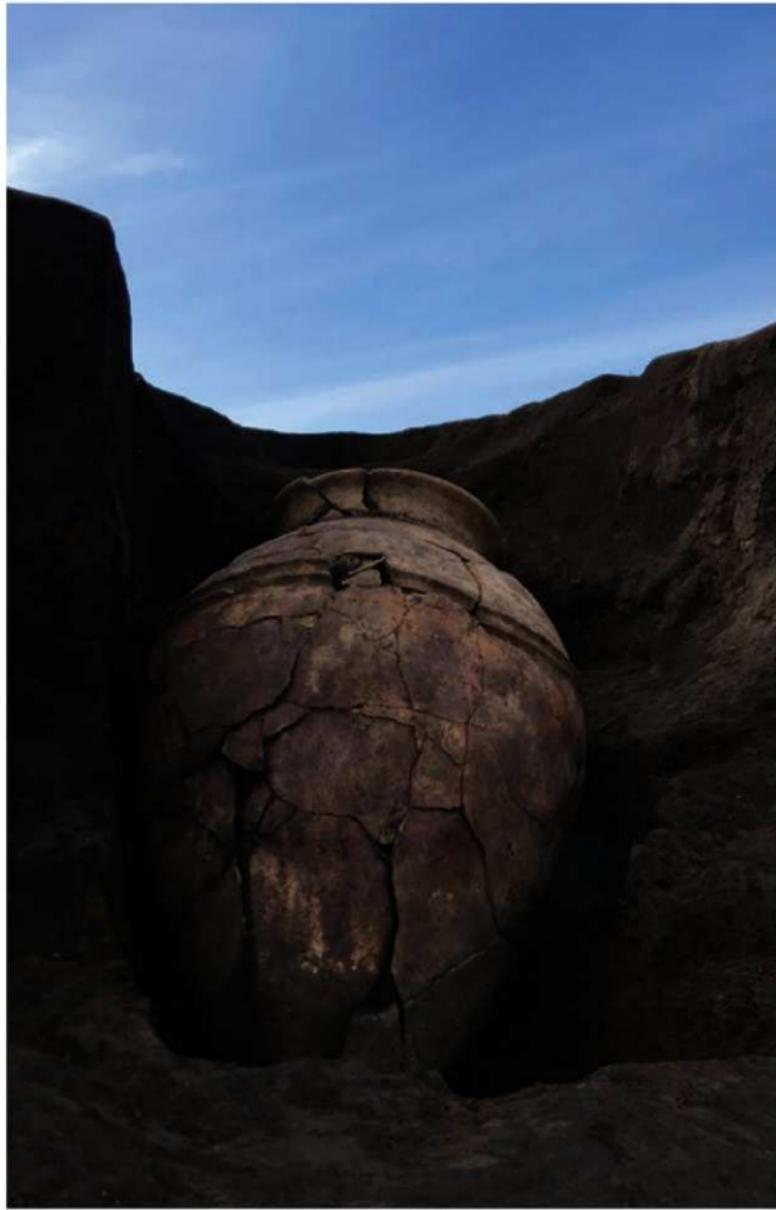
宮園 A 遺跡第 1 次調査区上空より飯田山を望む



宮園 A 遺跡第 1 次調査区全景



宮園 A 遺跡第 1 次調査区基本土層断面



墓棺墓 09 (S18) 墓棺檢出狀況



宮園 A 遺跡第 1 次調查出土臺棺



臺棺墓 01 (S16) 臺棺



臺棺墓 02 (S20) 臺棺



墓 06 (S02) 墓



墓 07 (S03) 墓



墓 09 (S18) 墓



墓 10 (S06) 墓

序文

前震、本震による震度7の揺れを2度も経験した平成28年熊本地震からまもなく5年が経過します。発災直後に熊本城や個人住宅等の甚大な被害が全国報道されたことはまだ記憶に新しいところですが、県では熊本地震からの創造的復興を掲げ、国や被災市町村と連携して住まいの早期再建をはじめとする復旧・復興事業に取り組んでまいりました。特に、地震の震源となった布田川断層帶上に位置する益城町の被害は大きく、県町が協力して益城中央被災市街地復興土地区画整理事業や都市計画道路益城中央線事業を推進しています。

今般、熊本県教育委員会では、土地区画整理事業に伴って宮園A遺跡第1次発掘調査を実施しました。調査では、益城町誌にまぼろしの遺跡と記載がある「宮園の甕棺群」の一部である弥生時代中期の甕棺墓が13基確認されるなどの成果がありました。益城町内における弥生時代の調査例は少なく、また今回が当該地周辺ではじめて実施された本格的な調査であることから、今回の成果は益城町の歴史を明らかにしていく上でも重要なになってくると考えております。

このように復旧・復興事業に伴って地中に埋もれていた地域の歴史を掘り起こしていくことも、熊本地震からの創造的復興の一部です。県教育委員会をいたしましても、地域の宝である文化財を後世に引き継いでいけるよう地元の方々に働きかけを行ってまいります。

また、今回の調査は、地震からの復旧・復興のために他自治体から派遣された職員の方々の御支援のもと実施することができました。熊本地震に伴う派遣職員の数は令和2年度現在、21自治体のべ54名となっております。現地で御活躍いただいた派遣職員の方々はもちろん、派遣に御尽力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

そして、本報告書が研究者のみならず、県民の皆様に幅広く活用され、地域の歴史を理解する一助になれば幸いです。

最後に発掘調査並びに本書の作成にあたり地元の皆様、熊本県都市計画課、益城復興事務所、益城町教育委員会の関係機関各位に多大な御理解と御協力をいただきました。さらに、多くの方々から御指導・御助言をいただき、ここに心よりお礼申し上げます。あわせて現地調査、整理作業に関わった職員、作業員諸氏の労苦に対しても謝意を表します。

令和3年（2021年）3月31日

熊本県教育長 古閑 陽一

例 言

- 1 本書は、熊本県上益城郡益城町に所在する宮園A遺跡の第1次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、益城中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴い熊本県知事の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。
現地調査（令和元年度（2019年度））

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	中村誠希（文化課長）
調査総括	長谷部善一（課長補佐）、宮崎敬士（主幹兼文化財調査班担当）
調査事務	伊藤 昭（課長補佐） 津田光生（主幹兼総務班担当）、松本哲郎・佐藤賢一（以上、参事）
調査担当	井鍋智之（静岡県派遣）、阿比留士朗（鹿児島県派遣）（以上、参事）、木庭真由子（主任学芸員）、春田哲也（学芸員）
- 整理作業（令和2年度（2020年度））

整理主体	熊本県教育委員会
整理責任者	中村誠希（文化課長）
整理総括	長谷部善一（課長補佐）、宮崎敬士（主幹兼文化財調査班担当）
整理事務	伊藤 昭（教育審議員兼課長補佐） 津田光生（主幹兼総務班担当）、佐藤賢一（参事）、佐藤虹夏・大石ひとみ（以上、主事）
整理担当	木庭真由子（参事）、稲葉貴子・唐木ひとみ・築出直美・中川 治・春川香子（以上、会計年度任用職員）
- 3 遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。
- 4 本書で用いた地形図は、国土地理院発行の45,000分の1の地形図及び熊本県地図統合システムをもとに作成した。
- 5 現地調査は、熊本県教育庁教育総務局文化課が指揮し、発掘調査補助業務を（株）イビソク九州支店に委託した。
- 6 遺物の実測・トレース・写真撮影は、（株）イビソク九州支店に委託した。
- 7 調査にあたり、以下のの方々から支援・助言・協力を受けた（敬称略・順不同）。

堤 英介・森本星史（益城町教育委員会）、原田昭一（大分県立歴史博物館）、中谷 正・池田 翔（神戸市文化スポーツ局文化財課）、今村結記（鹿児島県教育庁文化財課）、西野元勝（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、飛野博文（九州歴史資料館）、大庭孝夫（福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）
- 8 本書の執筆は、木庭・井鍋・阿比留が行った。
- 9 本書の編集は、木庭が担当し、熊本県教育庁教育総務局文化課が実施した。
- 10 本書に掲載した遺物・実測図・写真等の資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡 例

- 1 遺跡の座標は、世界測地系を使用している。方位は、座標軸を基準とした座標北を指している。
- 2 現地での構造実測は、平面図及び見通し図を10分の1、断面図を20分の1の縮尺で行った。
- 3 遺構図中の硬化面・カマド範囲はアミかけで図中に凡例を表記している。
- 4 遺物の実測は原寸でを行い、掲載した実測図の縮尺は掲図中に示している。
- 5 色調については遺構・遺物ともに『新版 標準土色帖』(1967年 農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に従った。
- 6 墓棺の大きさは、大型(80cm以上)、中型(80cm未満)とした。
- 7 墓棺墓の埋設軸は、世界測地系に基づく南北線と断面線からなる角度とした。埋設角度は、水平線と墓棺底部に直角に交わる線からなる角度とした。
- 8 土器型式は、主に橋口達也 2005『墓棺と弥生時代年代論』雄山閣と西健一郎 1983「黒髮式土器の基礎的研究」『古文化談叢』第12集 九州古文化研究会を参考にした。

本文目次

卷頭図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
1 事業の概要	1
2 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
1 旧石器時代	3
2 繩文時代	3
3 弥生時代	3
4 古墳時代	4
5 古代	4
6 中世	4
7 震災遺構	5
第3章 調査の方法と成果	6
第1節 調査の方法	6
1 調査区の設定	6
2 表土掘削	6
3 遺構検出・掘削	7
4 遺構測量	7
5 写真撮影	7
第2節 層序	7
第3節 遺構及び遺物	7
1 埋設土器遺構	7
2 銀棺墓	7
3 周溝状遺構	14
4 壁穴建物	18
5 土葬墓	19
6 溝	19
第4章 総括	24
第1節 調査の成果	24
1 銀棺墓群	24
2 その他の遺構	25
第2節 今後の課題	26
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

- 第1図 宮園A遺跡第1次調査区位置図
第2図 宮園A遺跡周辺遺跡図
第3図 調査区全体図
第4図 基本層序
第5図 埋設土器遺構01 (S08) 遺構図及び遺物実測図
第6図 墓棺墓01 (S16) 遺構図及び遺物実測図
第7図 墓棺墓02 (S20) 遺構図及び遺物実測図
第8図 墓棺墓03 (S10)・墓棺墓04 (S17) 遺構図及び遺物実測図
第9図 墓棺墓05 (S09) 遺構図及び遺物実測図
第10図 墓棺墓06 (S02)・墓棺墓07 (S03) 遺構図及び遺物実測図
第11図 墓棺墓08 (S19) 遺構図及び遺物実測図
第12図 墓棺墓09 (S18) 遺構図及び遺物実測図
第13図 墓棺墓10 (S06)・墓棺墓11 (S69)・墓棺墓12 (S68)・墓棺墓13 (S15) 遺構図及び遺物実測図
第14図 周溝状遺構01 (S01)・周溝状遺構02 (S07) 遺構図
第15図 壑穴建物01 (S05) 遺構図及び遺物実測図
第16図 壑穴建物02 (S04) 遺構図
第17図 土葬墓01 (S13) 遺構図及び遺物実測図
第18図 溝01 (S12) 遺構図

表 目 次

- 第1表 調査経過表
第2表 宮園A遺跡周辺遺跡一覧表

図版目次

- 卷頭図版 1
　宮園A遺跡第1次調査区上空より飯田山を望む
卷頭図版 2
　宮園A遺跡第1次調査区全景
　宮園A遺跡第1次調査区基本土層断面
卷頭図版 3
　墓棺墓09 (S18) 墓棺検出状況
卷頭図版 4
　宮園A遺跡第1次調査出土墓棺
　墓棺墓01 (S16) 墓棺
　墓棺墓02 (S20) 墓棺
卷頭図版 5
　墓棺墓06 (S02) 墓棺
　墓棺墓07 (S03) 墓棺
　墓棺墓09 (S18) 墓棺
　墓棺墓10 (S06) 墓棺
図版 1
　1. 宮園A遺跡第1次調査区遠景（北東から）
　2. 埋設土器遺構01 (S08) 遺物検出状況（西から）
　3. 墓棺墓01 (S16) 墓棺検出状況（西から）
　4. 墓棺墓01 (S16) 完掘状況（南西から）
　5. 墓棺墓02 (S20) 墓棺検出状況（北西から）
　6. 墓棺墓02 (S20) 完掘状況（北西から）
　7. 墓棺墓03 (S10) 墓棺検出状況（北東から）
　8. 墓棺墓03 (S10) 完掘状況（北東から）
図版 2
　1. 墓棺墓04 (S17) 墓棺検出状況（東から）
　2. 墓棺墓04 (S17) 完掘状況（北から）
　3. 墓棺墓05 (S09) 墓棺検出状況（北西から）
　4. 墓棺墓05 (S09) 完掘状況（北西から）
　5. 墓棺墓03 (S10)・05 (S09) 検出状況（東から）
　6. 墓棺墓06 (S02) 墓棺検出状況（北西から）
　7. 墓棺墓07 (S03) 墓棺検出状況（南西から）
　8. 墓棺墓08 (S19)・09 (S18) 検出状況（東から）
図版 3
　1. 墓棺墓08 (S19) 墓棺検出状況（東から）
　2. 墓棺墓08 (S19) 埋納状況（西から）
　3. 墓棺墓08 (S19) 完掘状況（東から）
　4. 墓棺墓09 (S18) 墓棺検出状況（東から）
　5. 墓棺墓09 (S18) 土層断面（北から）

- 第3表 遺物概要表
- 図版 4
　6. 墓棺墓09 (S18) 完掘状況（東から）
　7. 墓棺墓10 (S06) 墓棺検出状況（北西から）
　8. 墓棺墓10 (S06) 完掘状況（南から）
図版 4
　1. 周溝状遺構01 (S01) 完掘状況（北東から）
　2. 周溝状遺構02 (S07) 完掘状況（西から）
　3. 壑穴建物01 (S05) 完掘状況（東から）
　4. 壑穴建物02 (S04) 完掘状況（西から）
　5. 土葬墓01 (S13) 土層断面（西から）
　6. 土葬墓01 (S13) 遺物出土状況（西から）
　7. 溝01 (S12) 土層断面（南から）
　8. 溝01 (S12) 完掘状況（北から）
図版 5
　1. 埋設土器遺構01 (S08) 出土遺物
　2. 墓棺墓01 (S16) 出土遺物
　3. 墓棺墓02 (S20) 出土遺物①
　4. 墓棺墓02 (S20) 出土遺物②
図版 6
　1. 墓棺墓03 (S10) 出土遺物
　2. 墓棺墓04 (S17) 出土遺物①
　3. 墓棺墓04 (S17) 出土遺物②
　4. 墓棺墓05 (S09) 出土遺物
　5. 墓棺墓06 (S02) 出土遺物①
　6. 墓棺墓06 (S02) 出土遺物②
図版 7
　1. 墓棺墓07 (S03) 出土遺物①
　2. 墓棺墓07 (S03) 出土遺物②
　3. 墓棺墓08 (S19) 出土遺物①
　4. 墓棺墓08 (S19) 出土遺物②
　5. 墓棺墓09 (S18) 出土遺物
　6. 墓棺墓10 (S06) 出土遺物
図版 8
　1. 墓棺墓11 (S69) 出土遺物
　2. 墓棺墓12 (S68) 出土遺物
　3. 墓棺墓13 (S15) 出土遺物
　4. 壑穴建物01 (S05) 出土遺物①
　5. 壑穴建物01 (S05) 出土遺物②
　6. 壑穴建物01 (S05) 出土遺物③
　7. 土葬墓01 (S13) 出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

1 事業の概要

平成28年（2016年）4月14日及び16日の2度にわたり熊本県熊本地方を震源とする震度7の地震が観測され、気象庁により「平成28年度熊本地震」と命名された。この地震は都市部における直下型地震と発表され、布田川断層帯と日奈久断層帯が連動し引き起こされたもので、断層帯に沿った地域で甚大な被害が生じた。

布田川断層帯上に位置する上益城郡益城町では、住家の全壊2,756棟・半壊・一部損壊7,440棟と個人住宅を含む各インフラ等の被災状況が深刻であった。そのため、熊本県では被害を受けた市街地の緊急かつ健全な復興を図るために、平成29年（2017年）3月10日に被災市街地復興推進地域の都市計画決定を行った。その後、同決定に基づき平成30年（2018年）3月8日、被災市街地復興土地区画整理事業区域約28.3haについて都市計画決定を行った。また、熊本県県央広域本部土木部は、平成29年（2017年）4月2日に被災市街地復興土地区画整理事業及び都市計画道路益城中央線事業を益城町と協力して実施するとともに創造的復興を推進するため、同町に益城復興事務所（以下、「復興事務所」という。）を開所した。

2 調査に至る経緯

平成30年（2018年）3月27日付け央土復ま第20号で熊本県県央広域本部土木部長から熊本県教育長あてに益城中央被災市街地復興土地区画整理事業（以下、「土地区画整理事業」という。）区域約28.3haについて予備調査依頼が出された。これを受け熊本県教育庁教育総務局文化課（以下、「県文化課」という。）では、平成30年度（2018年度）から継続的に予備調査を実施している。土地区画整理事業区域である益城町木山地区は、埋蔵文化財包蔵地「宮園A遺跡」が広範囲に所在しており、県文化課では、現在までに80箇所以上のトレンチ調査を実施し、発掘調査対象地及び遺跡範囲の絞り込みを行っている。なお、事業区域内のうち益城町役場庁舎跡地等の予備調査については、新庁舎建設に伴う事業や大規模盛土造成地滑動崩落防止事業に伴うものとして益城町教育委員会（以下、「益城町」という。）が実施した。このように土地区画整理事業に伴う予備調査は県文化課と益城町で役割分担しながら行っている。また、土地区画整理事業をはじめとする地震からの



第1図 宮園A遺跡第1次調査区位置図

復旧・復興事業に伴い実施した県文化課及び益城町による予備調査結果を基に周知の埋蔵文化財包蔵地「宮園A遺跡」の範囲を令和2年（2020年）6月3日付け教文第446号で変更した。

令和元年度（2019年度）に役場駐車場跡地の造成工事が実施されることになったが、益城町による予備調査で当該地には埋蔵文化財の存在が認められており、事前の発掘調査が必要と判断された。事業の実施にあたり復興事務所・県文化課・益城町で協議を行った結果、本造成工事については土地区画整理事業の一環として復興事務所が実施することとなり、発掘調査も県文化課が実施することとなった。土地区画整理事業の実施にあたり文化財保護法（昭和25年法律第214号）第94条第1項の規定に基づき令和元年（2019年）5月27日付け央益区工第17号で熊本県知事から埋蔵文化財発掘の通知が提出されており、令和元年（2019年）10月15日付け教文第1599号で熊本県教育委員会から発掘調査の実施を通知した。

宮園A遺跡第1次発掘調査は、平成28年熊本地震からの復旧・復興事業に伴い他自治体から派遣された職員の支援を受け、令和元年（2019年）10月から約2か月間実施した。調査面積は、2,354.4m²である。調査終了後、発掘調査で出土した文化財については遺失物法（平成18年法律第73号）に基づき文化財の発見届を御船警察署長あて通知した。

第2節 発掘作業の経過

現地調査は、令和元年（2019年）10月30日より着手し、11月7日までバックホウによる1回目の表土掘削を行った。表土掘削後に測量用の基準杭及びグリッド杭を打設した。

11月5日より作業員を投入し、トレンチ掘削や壁面清掃、搅乱掘削などの作業を開始した。

11月8日より遺構検出を本格的に実施し、随時、写真撮影・遺構掘削・遺構実測を行った。調査区内は予想外に搅乱があり、作業員による掘削土量は当初計画より大幅に増加した。アカホヤ二次堆積層が遺存している調査区西側では周溝状構造、小穴、溝1条を、アカホヤ二次堆積層が削平されていた調査区東側では、クロニガ層及びシロニガ層で埋設土器遺構1基、甕棺墓9基、堅穴建物2棟、土葬墓1基を確認した。

11月26日より調査区北側において2回目の表土掘削を行い、表土下0.1m～0.4mでシロニガ層を確認した。アカホヤ二次堆積層は削平されていたものの、甕棺墓4基を確認した。

12月7日には甕棺墓が多数発見されたことをはじめとする今回の調査成果を広く一般に公開するため、現地説明会を開催し、69名の参加があった。

12月19日にドローンを用いて空中写真撮影を行った後、検出した甕棺墓、堅穴建物等の遺構掘削・実測・写真撮影を行い、12月27日に調査を完了した。

その後、機材搬出及びプレハブ等の撤去等を行い、現場での作業を終了した。また、現場作業と並行しながら、令和2年（2020年）3月まで、出土遺物や遺構図の整理といった基礎整理作業を行った。

第3節 整理等作業の経過

本格的な整理作業は、令和2年度（2020年度）に熊本県文化財資料室で実施した。4月に土器洗浄及び注記作業を行い、5月から8月にかけて接合作業を行った。9月から10月には、実測・製図作業及び写真撮影を実施した。令和3年（2021年）3月にすべての作業を完了し、報告書（本書）を刊行した。なお、整理作業の一部は株式会社イビゾクに委託した。

第1表 調査経過表

	令和元年度（2019年度）						令和2年度（2020年度）										
	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
発掘作業	（発掘作業）																
	（基礎整理作業）																
整理等作業							（土器洗浄） （注記作業）	（接合作業）	（実測・製図作業） （写真撮影）								（刊行）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

益城町は熊本県のほぼ中央にあり、東西約11km、南北約13km、周囲45kmである。行政域としては上益城郡に属し、西は上益城郡嘉島町・熊本市、東は阿蘇郡西原村、北は菊池郡大津町・同菊陽町、南は上益城郡御船町に接する。地形は、山地・丘陵地・台地・段丘低地に大きく分類される。町の東部から南部にかけては九州山地から派生する城山(480.4m)・朝来山(469.5m)・野舟山(307.8m)・飯田山(481.2m)等が山塊を形作る。北部一帯は、阿蘇外輪山から西に延びる広大な高遊原台地・託麻台地が広がり、益城町の中心部はこの台地の南縁辺部に東西に広がっている。北部の台地と東部・南部に挟まれた中央の低地部には阿蘇外輪山及び冠ヶ岳を水源とする木山川が東から西に向かって流れおり沖積平野が発達する。この低地部の西側は熊本平野に連なっており、その東城をなしている。また、南西部の飯田山麓から隣接する嘉島町にかけては北甘木台地が広がる。

町中央部にはマグニチュード(Mj)7.3、最大震度7を観測した平成28年熊本地震の震源断層である布田川断層帯が東西に走る。布田川断層帯は、九州中央部の「別府—島原地溝」の南縁に位置する活断層群である。当該断層帯は、地震前から地形調査等によって活断層として認識されており、その分布は阿蘇外輪山の西側にあたる南阿蘇村から宇土半島先端部まで全長約64km以上と考えられてきた。今回の地震により地上に露出した布田川断層帯の地表地震断層は、西原村から益城町・嘉島町にかけてほぼ連続的に長さ約31kmである。地表に露出した地表地震断層のうち、益城町杉堂地区・堂園地区・谷川地区の3ヶ所については、学術上の価値及び震災遺構としての価値から平成30年(2018年)2月13日に国の天然記念物に指定された。

町域を流れる主な河川は、木山川・赤井川・秋津川・金山川・岩戸川等すべて有明海へと注ぐ緑川流域加勢川水系に属している。また、布田川断層帯に沿って豊富な湧水がみられ、特に杉堂地区にある潮井水源では、断層崖の北側に水脈が露出しており、飲料水や生活用水として利用されている。

町域に堆積する土壌は阿蘇の噴火とともに形成された火山性溶結凝灰岩を基盤とし、その上に火山灰土が厚く覆っている。今回の調査区が位置する町中心部の高遊原台地・託麻台地における標準的な土層堆積は、上位からクロボク、アカホヤ、ニガ土(固いブロック状堆積層)、ロームである。

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

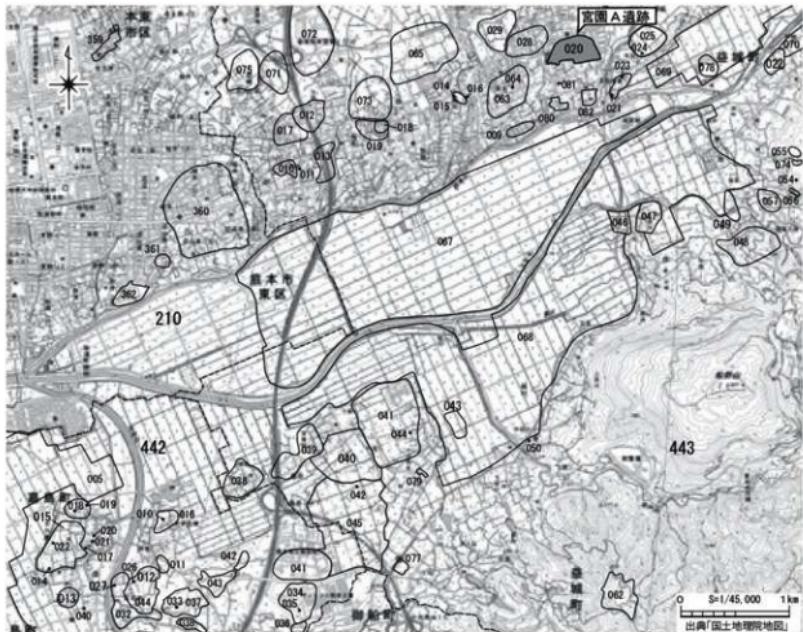
塔平遺跡から細石器・スクレイバー・剥片・礫器が表面採集され、高遊原台地上の日向地内から予備調査で姶良Tn火山灰を包含する層の上部より緑色チャート製二次加工剥片が2点出土するなど石器自体は散見されるが、発掘調査による旧石器時代の調査事例は現在ところない。

2 繩文時代

繩文時代早期の遺跡として、昭和47年(1972年)に九州自動車道に伴う発掘調査が実施された櫛島遺跡が知られる。当遺跡からは、調理施設と考えられる集石遺構や構造を呈する炉穴跡が検出されており、押型文土器や塞ノ神式土器が出土している。後晩期になると高遊原台地縁辺部を中心に遺跡数が増え、特に古闕遺跡・古闕北遺跡からは、晩期終末期の黒色磨研土器が多量に出土しており、古闕式土器の標識遺跡となっている。

3 弥生時代

弥生時代の遺跡は、木山川によって形成された沖積平野を望む地域に分布がみられる。八反田遺跡では8基の甕棺が出土したほか、板付式の壺形土器や夜臼式の甕形土器を使用していたことが確認された。その他、秋永遺跡では甕棺及び環濠が、大辻遺跡では祭祀土坑や周溝状遺構が検出されている。また、益城町誌に記載があるものの未調査であった宮園の甕棺群や平田遺跡出土の甕棺については、熊本地震からの復旧・復興事業に伴い県文化課や益城町によって近年、発掘調査が実施されている。今回発掘調査を実施した宮園A遺



第2図 宮園A遺跡周辺遺跡地図

跡第1次調査区は、宮園の甕棺群の一部である。

4 古墳時代

古墳時代の遺跡としては、小池地区の台地上や高遊原台地・託麻台地縁辺部、福原地区、上陳地区的台地上に墳墓が展開する。前期から中期にかけては、内行花文鏡が副葬された城の本古墳群や秋永遺跡の方形周溝墓と外部施設を持たない箱式石棺などが認められる。後期になると小池地区に鬼塚古墳、寺迫地区に遠見塚古墳、福原地区に鬼ノ窟古墳などが築造される。また、寺迫から田原地区と福原地区の崖面には横穴墓がみられる。集落遺跡としては小柳遺跡が知られる。

5 古代

益城町内には木山川流域に広がる沖積平野に条里跡が広く分布している。これは、「阿蘇家文書」に記載されている地名の比定が行われた結果であるが、発掘調査の実施数は少ない。そのような中、水田圃場整備事業の際に秋永集落北西の横田里推定地域から水田跡が検出されており、古代の条里遺構である可能性が指摘されている。その他、高遊原台地・託麻台地縁辺部に位置する大辻遺跡では、近年、カマド付竪穴建物や掘立柱建物、祭祀遺構が検出されており、古代の集落の様相について新たな知見が得られている。

6 中世

平安時代末から鎌倉時代以降にかけて益城町では寺院の造営が活発になる。飯田山常楽寺や福田寺、道安寺、東福寺など地区ごとに伝承されるほどに寺院が集中する。寺院を宗派別にみると、天台宗と禪宗に分類されるが、天台宗系の寺院が多い。寺院の多さをうかがわせるように、現在でも町内には石造物が数多く残る。また、小池遺跡では「寺地面」と呼ばれる地区名から寺院が建立されていたと考えられており、そこから30個体ほどの石造物が出土している。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 調査区の設定

宮園A遺跡第1次発掘調査区は、益城町による確認調査結果を基に事業予定地内に東西最大76.5m、南北最大57.5mの範囲で設定した。調査面積は2,354.4m²である。

当該地は、平成28年熊本地震で被災する前まで益城町役場駐車場として利用されていた。また、駐車場であった調査区に比べ北側の役場庁舎跡地は2.4m程高く、南側の道路は3.5m程低くなっていることから、当該地は削平や盛土等により土地が大きく改変されていることが想定された。

発掘調査を実施するにあたり、調査対象地に国家座標軸（世界測地系）に基づき、10m間隔のグリッドを設定した。宮園A遺跡第1次調査区の起点は、調査区北西隅（X = -23,095, Y = -17,190）とし、東西方向にアルファベットを、南北方向に数字をふり、両者を組み合わせてグリッド名とした（第3図）。

2 表土掘削

調査では、現地表から0.5m～1.0mほどの深さまでバックホウを用いて表土を除去した。工事の関係で表土掘削は大きく2回に分けて実施した。バックホウのバケットは平爪を装着し、排土移動にも複数のバックホウを用い、事業予定地内に仮置きした。表土を除去したところ、調査区西側はアカホヤ二次堆積層が残存していたが、東側は搅乱や削平により遺構の遺存状況は良好ではなかった。



第3図 調査区全体図

3 遺構検出・掘削

遺構の検出は、アカホヤ二次堆積層及びクロニガ層、シロニガ層で行った。遺構検出・掘削には移植ゴテや鍛籠を用い、人力で行った。なお、排土移動にはベルトコンベアを用い、掘削作業の効率化を図った。

調査区西側は小穴が多く、樹根との区別をはかりながら掘立柱建物等を想定し、遺構検出に努めた。他方、東側は搅乱が多く、遺存状況が良好ではなかったものの甕棺墓や竪穴建物等が検出された。

4 遺構測量

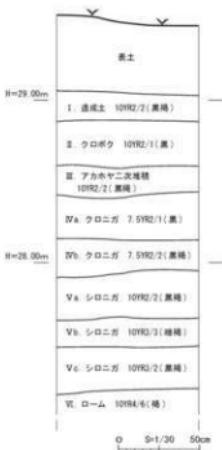
遺構実測図の作成は、必要に応じてトータルステーション・オートレベル・ドローン等を用い、平面及び断面の記録をとった。特に甕棺墓の実測図作成においては、STM/MVSによる三次元計測を用いた。図化するにあたり三次元データ及びオルソ画像をもとに10分の1縮尺で平面図・見通し図を作成した。また、遺構断面図は20分の1の縮尺で作成した。

5 写真撮影

遺構等の写真撮影はフルサイズのデジタルカメラを主体に作業状況等の写真についてはコンパクトデジタルカメラを用いた。高所からの撮影にはドローンを用い、個別遺構の全景写真及び遺跡の全体写真、周辺地形の遠景写真を撮った。

第2節 層序

宮園A遺跡第1次調査区の基本層序は、表土の下にI層造成土、II層クロボク層、III層アカホヤ二次堆積層、IV層クロニガ層、V層シロニガ層、VI層ロームである(第4図)。調査区東端はIV層まで削平されていた。調査区東側と西側の堆積層標高はVI層を基準とした場合、西側が東側より1.2m程低くなっている。また、周辺地形と基本層序を踏えた結果から、本来の地形は北東部が高く、南西に向かうにしたがって地形が低くなっていたと考えられる。削平の影響もあり、今回の調査における遺構検出面は、Dグリッド列以西はIII層、E・Fグリッド列はIV層、G・Hグリッド列はV層である。



第4図 基本層序

第3節 遺構及び遺物

1 埋設土器遺構

埋設土器遺構 01【S08】(第5図、図版1・5)

F-5グリッドで確認した埋設土器遺構である。東西0.72m、南北0.86m、深さ0.38mの平面円形である。搅乱により土坑中央部が切られているが、堅に掘った穴に深鉢を垂直に埋設している。埋設土器遺構は墓または貯蔵穴としての用途が推測されるが、深鉢内部から遺物等は出土しておらず、その用途は不明である。

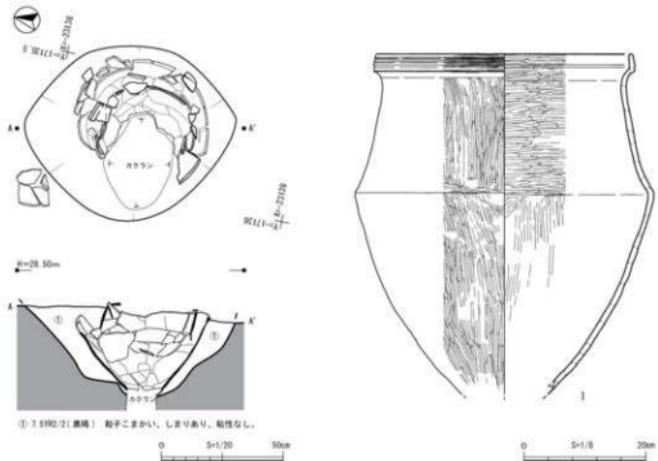
1は、黒色磨研土器で天城式の深鉢形土器である。口縁部は直立し、外面に3条の浅い沈線を持つ。頸部の界線はなく、最大径は胴部最上部で49.0cmである。深鉢は、約3cm幅の粘土紐を積み上げ成形されている。調整は、外面内面ともに丁寧にミガキが施されている。

2 甕棺墓

甕棺墓 01【S16】(第6図、図版1・5)

F-G-2グリッドで確認した大型の甕棺墓である。長軸(東西)0.96m、短軸(南北)0.70mの平面横円形である。墓坑上部は削平により失われているが、墓坑西壁の傾斜を緩やかに造り、その緩斜面に甕棺を沿わせるように埋納している。埋設軸はN-126°-W、埋納角度は46°である。棺内は土で埋まっており、人骨や副葬品は検出されなかった。

2は、下葬で汲田式(KIIc式)の甕形土器である。口縁部は、内側に大きく張り出したT字形で、外に低



第5図 埋設土器遺構01(S08) 遺構図及び遺物実測図

く傾斜している。胸部上半は外側に開き気味で、胸部下位に断面三角形の突帯が2条めぐる。器壁は極めて薄く、最大径は口縁部直下で70.6cmである。底部は平底である。調整は、外面はナデとハケ、内面はナデが施されている。

要棺墓02【S20】(第7図、図版1・5)

G-2グリッドで確認した大型の合口要棺墓である。長軸(東西)1.44m、短軸(南北)0.76mの平面楕円形である。墓坑上部は削平により失われているが、墓坑西壁の傾斜を緩やかに造り、その緩斜面に要棺を沿わせるように埋納している。埋設軸はN-69°-Wで、埋納角度は-8°と水平に近い。上蓋、下蓋とともに大部分が失われ、棺内は土で埋まっていた。棺内部から人骨や副葬品は検出されなかった。

3は、上蓋で汲田式(KIIc式)の甕形土器である。全体に丸みが強く、これは橋口達也が指摘する丸みを帯びた要棺の一連の系列(横口2005)ととらえられる。口縁部ではなく、胸部のみが残る。胸部には、断面三角形の突帯が2条めぐる。最大径は突帯部で54cmである。調整は、外面内面ともにナデが施されている。

4は、下蓋で汲田式(KIIc式)の甕形土器である。口縁部は、内側に大きく張り出したT字形で、外に低く傾斜している。胸部上半は外側に開き気味で、胸部下位に断面三角形の突帯が2条めぐる。器壁は極めて薄く最大径は口縁部直下で63.0cmである。底部は平底である。調整は、外面内面ともにナデが施されている。

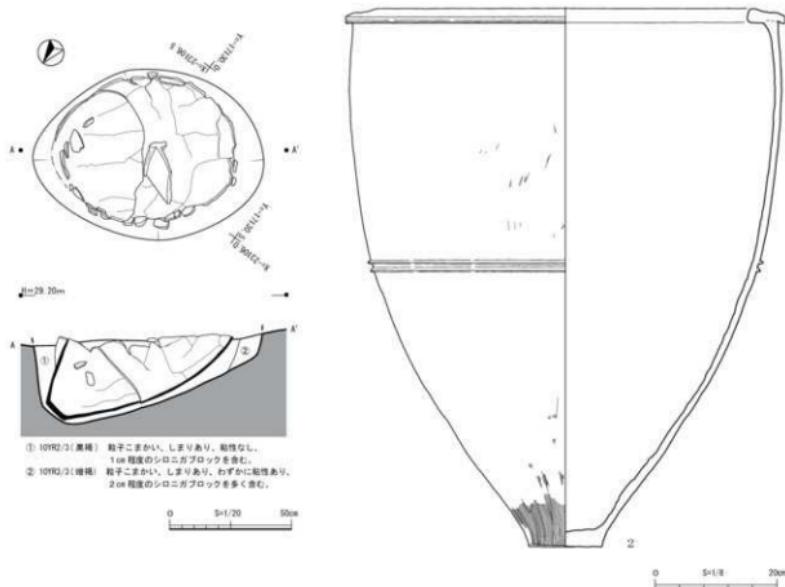
要棺墓03【S10】(第8図、図版1・2・6)

F-3グリッドで確認した大型の要棺墓である。長軸(東西)0.70m、短軸(南北)0.68mの平面円形である。墓坑上部は削平により失われているが、墓坑東壁の傾斜を緩やかに造り、その緩斜面に要棺を沿わせるように埋納している。埋設軸はN-68°-E、埋納角度は42°である。棺内は土で埋まっており、人骨や副葬品は検出されなかった。

5は、下蓋で汲田式(KIIc式)の甕形土器である。3同様、全体に丸みを帯びる。胸部には、断面三角形の突帯が2条めぐる。器壁は極めて薄く最大径は突帯部で53.6cmである。底部は平底である。調整は、外面はハケとナデが施されている。

要棺墓04【S17】(第8図、図版2・6)

G-2グリッドで確認した中型の合口要棺墓である。長軸(東西)0.92m、短軸(南北)0.64mの平面方



第6図 墓棺墓01 (S16) 造構図及び遺物実測図

形である。墓坑上部は削平により失われているが、墓坑西壁の傾斜を緩やかに造り、その緩斜面に喪棺を沿わせるように埋納している。埋設軸はN-91°-W、埋納角度は33°である。上壺と下壺の合口部には粘土で目張りされていた痕跡がある。下壺はほぼ完形で出土したが、上壺は胸部の一部しか出土しておらず、棺内は土で埋まっていた。棺内部から人骨や副葬品は検出されなかった。

6は、上壺で黒髪II式の甕形土器である。最大径は胸部上位で44.4cmである。調整は、外面内面ともにハケが施されている。

7は、下壺で黒髪II式の甕形土器である。口縁部はやや細長い。口縁部下で胸部が一旦することにより口縁部が内傾している。また、口縁部内面には突起が若干認められ、口縁部下に断面三角形の突帯が1条めぐる。最大径は胸部上位で46.4cmである。底部は上げ底状の脚台である。調整は、外面はナデとハケ、内面はハケ後ナデが施されている。

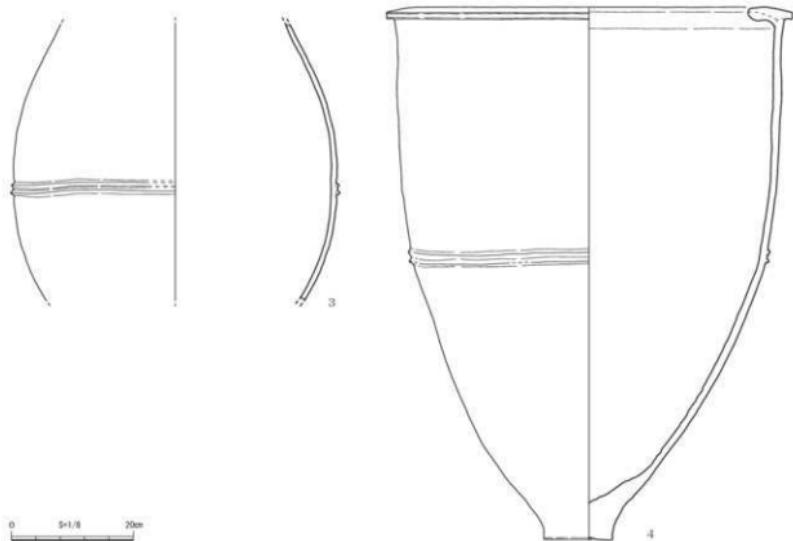
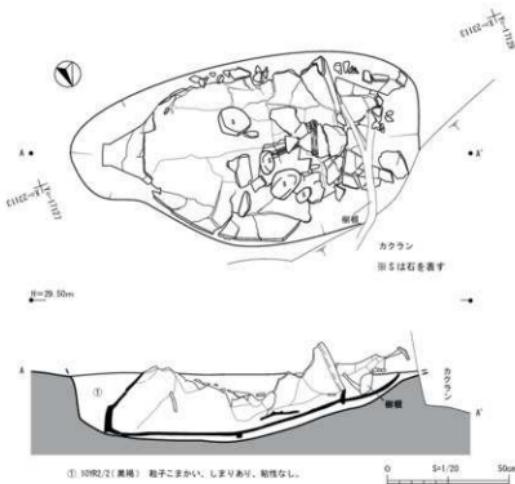
墓棺墓05【S09】(第9図、図版2・6)

F-3グリッドで確認した中型の墓棺墓である。長軸(東西)0.76m、短軸(南北)0.60mの平面橢円形である。墓坑上部は削平により失われている。墓坑は東側の壁をオーバーハングするよう斜めに掘り込み、墓坑壁にできた横穴にはめこむように喪棺を埋納している。埋設軸N-118°-W、埋納角度39°である。棺内は土で埋まており、人骨や副葬品は検出されなかった。

8は、下壺で黒髪II式の甕形土器である。最大径は胸部上位で45.0cmである。底部は上げ底状の脚台である。調整は、外面はナデとハケ、内面はハケ後ナデが施されている。

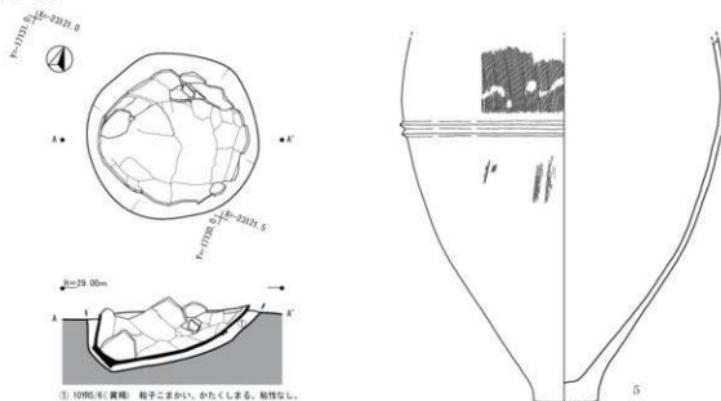
墓棺墓06【S02】(第10図、図版2・6)

H-5グリッドで確認した中型の合口墓棺墓である。長軸(東西)1.00m以上、短軸(南北)0.54m以上の平面橢円形と考えられる。墓坑は、削平により大きく失われている。埋設軸N-136°-W、埋納角度18°

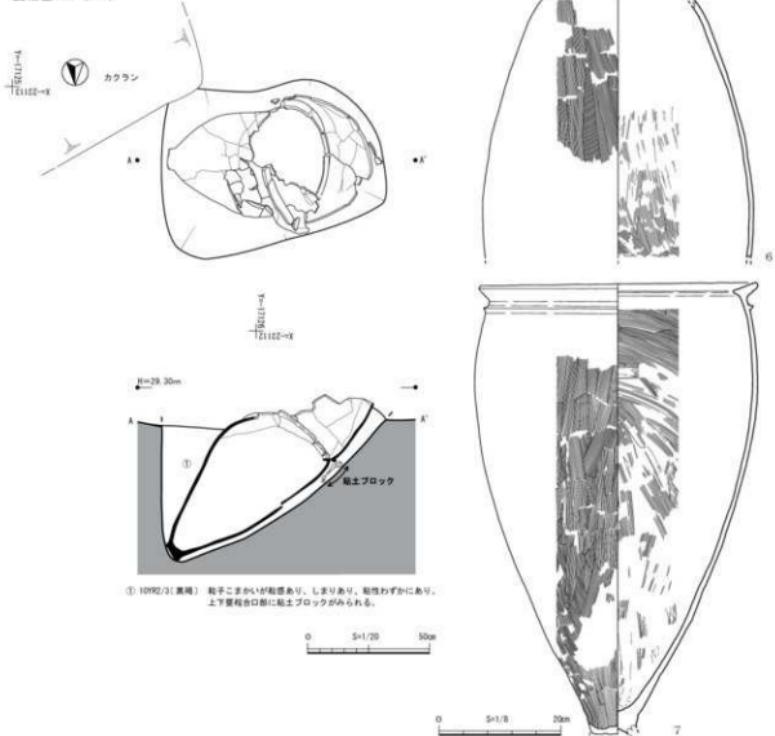


第7図 墓室基02 (S20) 造構図及び遺物実測図

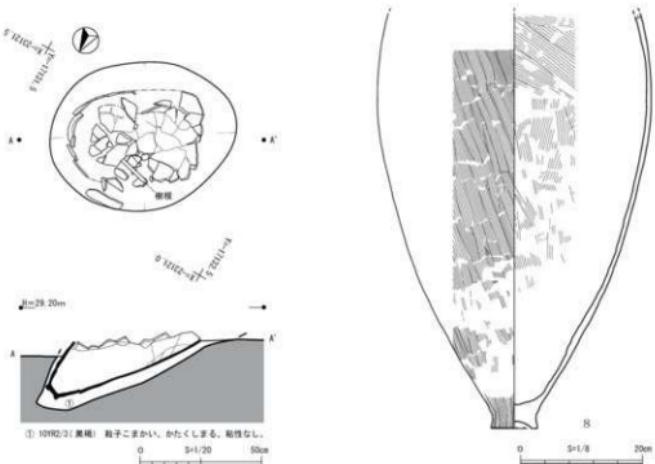
要棺墓 03 (S10)



要棺墓 04 (S17)



第8図 要棺墓 03 (S10)・要棺墓 04 (S17) 造構図及び遺物実測図



第9図 壱棺墓05(S09) 遺構図及び遺物実測図

である。棺内は土で埋まっており、人骨や副葬品は検出されなかった。

9は、上甕で黒焼I式の彌形土器である。口縁部は厚くU字形で、口縁部下に断面三角形の突帯が1条めぐる。最大径は胴部で35.8cmである。調整は、外面はナデとハケ、内面はナデが施されている。

10は、下甕で黒焼II式の彌形土器である。口縁部は細長く、く字形である。口縁部下で胴部が一旦しまることにより口縁部が内傾している。また、口縁部には内面突起が認められ。口縁部下に断面三角形の突帯が1条めぐる。最大径は胴部上位で45.0cmである。底部は上げ底状の脚台である。調整は、外面はハケとナデ、内面はハケ後ナデが施されている。

壹棺墓07【S03】(第10図、図版2・7)

H-4グリッドで確認した中型の合口壺棺墓である。長軸(東西)0.84m、短軸(南北)0.70mの平面橢円形である。墓坑上部は削平により失われているが、墓坑南壁の傾斜を緩やかに造り、その緩斜面に壺棺を沿わせるように埋納している。埋設軸N-139°-E、埋納角度31°である。棺内は土で埋まっており、人骨や副葬品は検出されなかった。

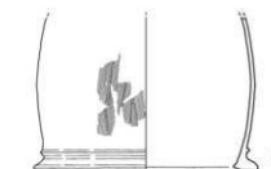
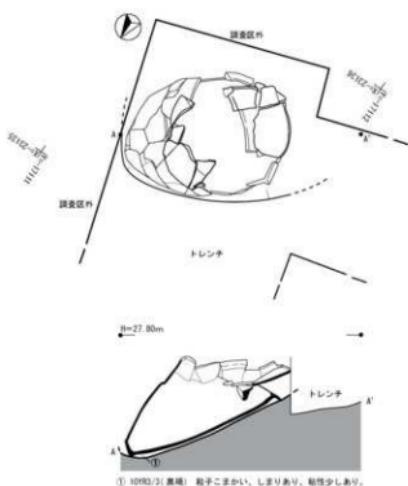
11は、上甕で黒焼II式の鉢形土器である。口縁部は細長く外側にのび、口縁部上面が若干へこむ。口唇部は平らに面取りが施されている。調整は、外面はナデ、内面はナデとハケが施されている。

12は、下甕で城ノ越系の器形を踏襲した彌形土器である。口縁部は故意に打ち欠かれたと考えられる。肩部が張り、胴部上位に断面三角形の突帯が2条めぐる。最大径は突帯部で51.6cmである。底部は平底である。調整は、外面はミガキ、内面はナデが施されている。

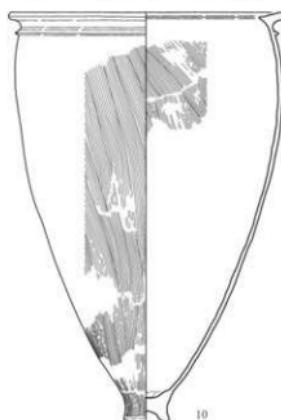
壹棺墓08【S19】(第11図、図版2・3・7)

E-3グリッドで確認した中型の壺棺墓である。長軸(東西)1.82m、短軸(南北)1.34mの平面橢円形である。当墓東側の搅乱掘削時に壺棺の一部を確認した。後世の削平及び搅乱掘削により壺棺墓東側の構造は不明であるが、2段墓坑で墓坑西壁の傾斜を緩やかに造り、その緩斜面に壺棺を沿わせるように埋納している。埋設軸はN-85°-W、埋納角度は20°である。壺棺は土圧によってつぶれていたが、ほぼ完形の状態で出土した。上甕や蓋の痕跡は確認されておらず、棺内は土で埋まっていた。棺内から甕が1点出土したが、破片が極めて少ないと副葬品ではなく棺外からの流れ込みと考えられる。人骨は検出されなかった。

要棺墓 06 (S02)

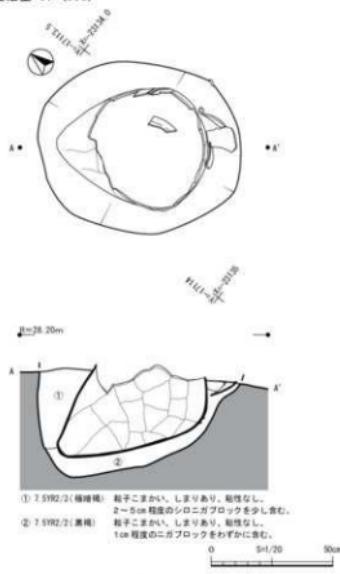


9

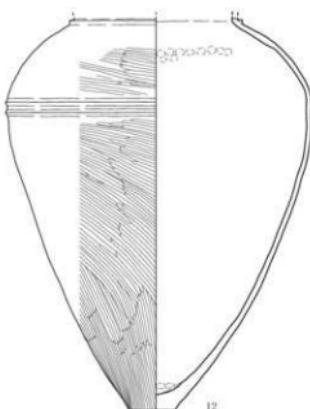


10

要棺墓 07 (S03)



11



12

第10図 要棺墓 06 (S02)・要棺墓 07 (S03) 造構図及び遺物実測図

13は、下甕で黒髪III式の壺形土器である。口縁部は故意に打ち欠かされたと考えられる。口縁部下及び胴部に刻み目を施した突帯が1条ずつめぐる。最大径は胴部上位で61.6cmである。底部は平底である。調整は、外面はミガキが施され、胴部上位に暗文がみられる。内面は、ハケ後ナデが施されている。

14は、壺形土器である。調整は、外面内面ともにナデが施されている。

壺棺墓09【S18】(第12図、図版2・3・7)

E-3グリッドで確認した中型の壺棺墓である。長軸(東西)1.98m、短軸(南北)1.16mの平面楕円形である。壺棺墓08同様、当墓東側の搅乱掘削時に壺棺の一部を確認した。後世の削平及び搅乱掘削により壺棺墓東側の構造は一部不明であるが、3段墓坑で墓坑東側の壁をオーバーハングするように斜めに掘り込み、墓坑壁にできた横穴にはめこむように壺棺を埋納したと考えられる。埋設軸はN-97°-W、埋納角度は31°である。壺棺は、ほぼ完形の状態で出土したが、上蓋や蓋の痕跡は確認されておらず、棺内は土で埋まっていた。棺内部から人骨や副葬品は検出されなかった。

15は、下甕で黒髪III式の壺形土器である。口縁部は、鋸先形口縁でわずかに内傾し、口縁部外側へのびる。口唇部は丸い。頸部と胴部の境でく字形に折れる。口縁部下に1条、胴部中位に2条の断面三角形の突帯がめぐる。最大径は突帯部で55.9cmである。底部は幅が極端に狭い平底で、全体的に細長く直線的な器形をとる。調整は、外面は全体にミガキが施され、口縁部に3本単位の暗文がみられる。内面は、ナデが施されている。

壺棺墓10【S06】(第13図、図版3・7)

F-4グリッドで確認した中型の壺棺墓である。長軸(東西)0.88m、短軸(南北)0.52m以上の平面円形と考えられる。墓坑上部は削平により失われているが、墓坑西壁の傾斜を緩やかに造り、その緩斜面に壺棺を沿わせるように埋納している。埋設軸はN-94°-W、埋納角度は59°である。壺棺は口縁部付近が失われ、棺内は土で埋まっていた。棺内部から人骨や副葬品は検出されなかった。

16は、下甕で黒髪IV式の壺形土器である。口縁部は内側に内傾し、上面がへこんでいる。口縁部と胴部の境でく字形に折れ、胴部や上位に断面三角形の突帯が1条めぐる。最大径は突帯部で47.5cmである。底部幅が広くやや丸みを帯びた器形をとる。調整は、外面はミガキ、内面はナデが施されている。

壺棺墓11【S69】・壺棺墓12【S68】・壺棺墓13【S15】(第13図、図版8)

そのほか削平により明確な墓坑は確認できなかったものの、3基の壺棺を確認した。

17(壺棺墓11)は、G-4グリッドで確認した汲田式(KIIc式)の壺形土器である。断面三角形の突帯が2条めぐる。器壁は極めて薄い。調整は、外面はハケ後ナデ、内面はナデが施されている。

18(壺棺墓12)は、G-2グリッドで確認した黒髪II式の壺形土器である。調整は、外面はハケ後ナデ、内面はナデが施されている。

19(壺棺墓13)は、F-5グリッドで確認した黒髪IV式の壺形土器である。朝顔形口縁を持ち、口唇部は平らに面取りされている。胴部上位及び中位に刻み目のある断面三角形の突帯が1条ずつめぐる。調整は、外面はナデとミガキが施され、口縁部に暗文がみられる。内面は頸部にミガキ、胴部にナデが施される。

3 周溝状遺構

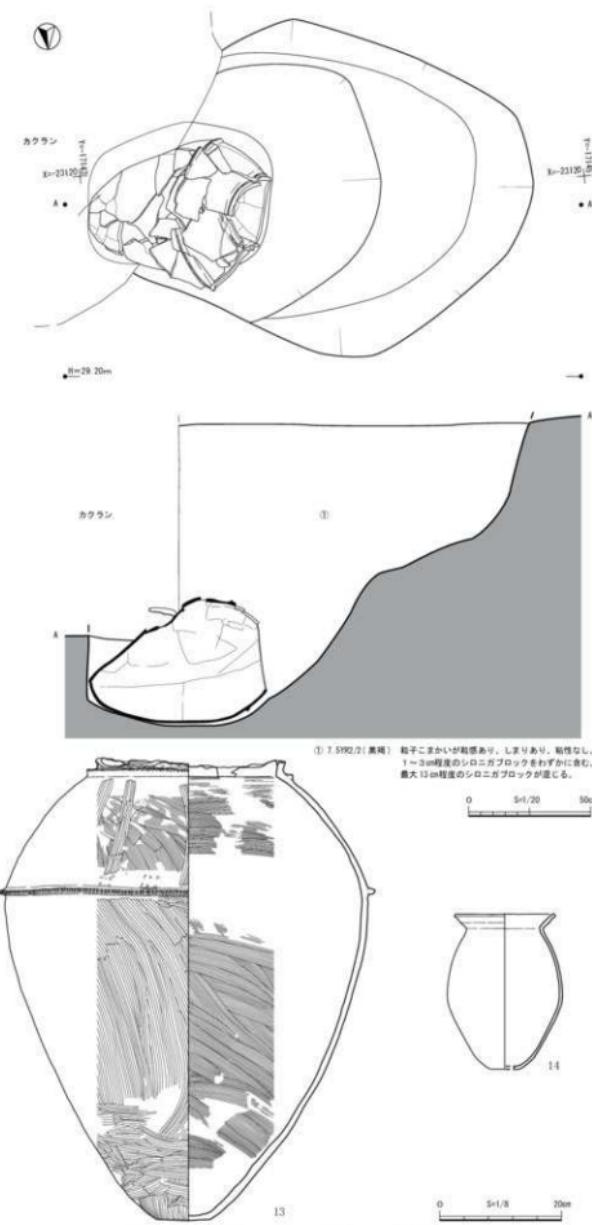
周溝状遺構01【S01】(第14図、図版4)

B-5・6グリッドで確認した周溝状遺構である。長軸(東西)7.44m、短軸(南北)4.64m、溝幅0.56m~1.04m、深さ0.08mで平面長楕円形をしている。遺構中央部や周溝内部に小穴等の遺構はみられない。

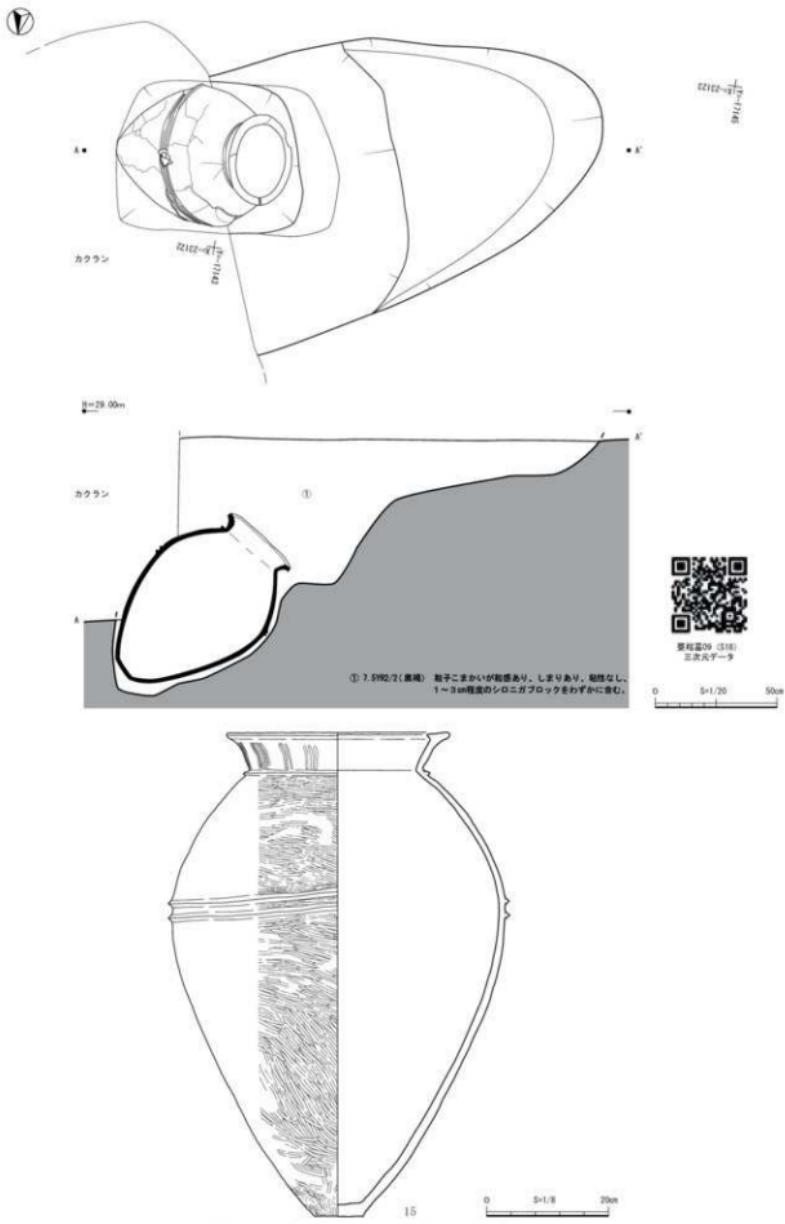
周溝状遺構02【S07】(第14図、図版4)

A・B-4グリッドで確認した周溝状遺構である。周溝は調査区外北側に続いており部分的な検出にとどまるが、長軸(東西)10m、溝幅0.72m~1.20m、深さ0.16m~0.36mで、周溝01同様、平面長楕円形と想定される。

周溝01・02とともに、埋土は基本層序II層(クロボク)同等層である。溝の深さが極めて浅いことから後世に大きく削平を受けたと考えられる。また、遺物も出土しておらず明確な時期や用途は不明である。

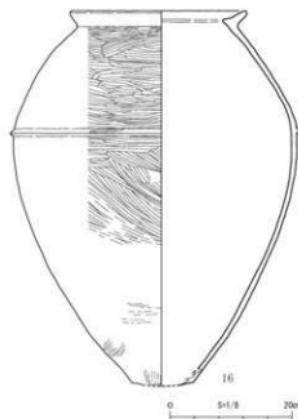
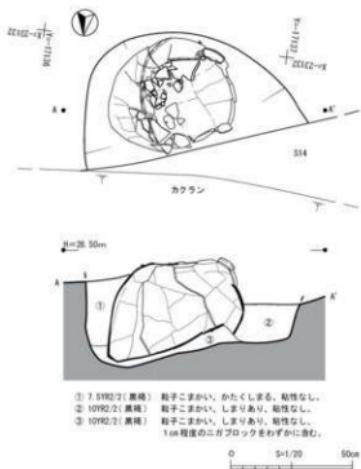


第11図 要棺墓08 (S19) 造構図及び遺物実測図

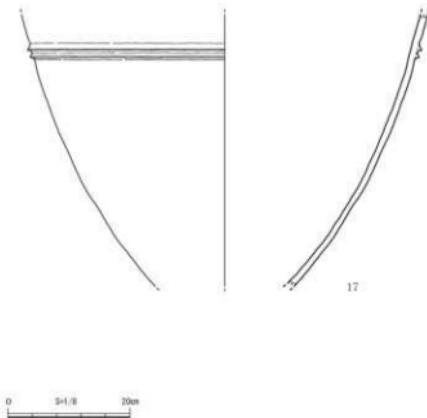


第12図 豊根墓09 (S18) 造横図及び遺物実測図

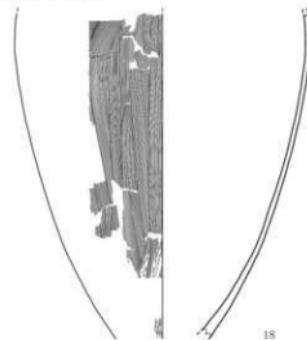
要棺墓 10 (S66)



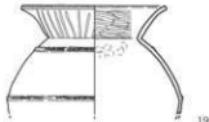
要棺墓 11 (S69)



要棺墓 12 (S68)

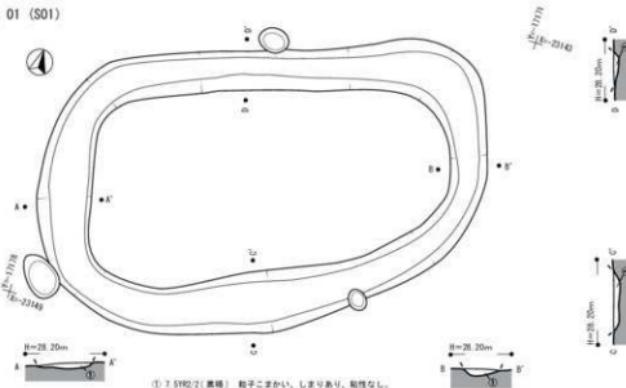


要棺墓 13 (S15)

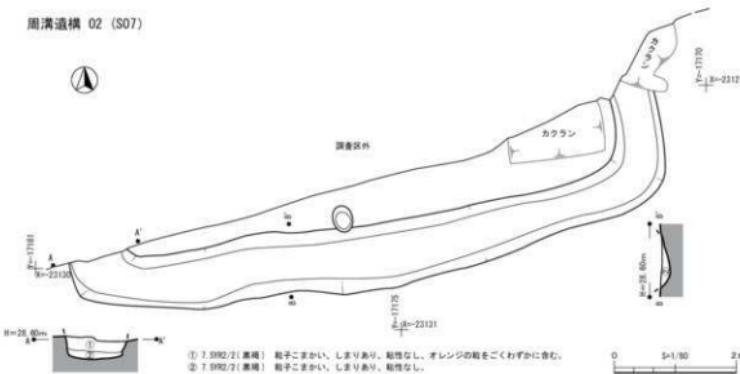


第13図 要棺墓 10 (S66)・要棺墓 11 (S69)・要棺墓 12 (S68)・要棺墓 13 (S15) 造構図及び遺物実測図

周溝遺構 01 (S01)



周溝遺構 02 (S07)



第14図 周溝状遺構 01 (S01)・周溝状遺構 02 (S07) 遺構図

4 竪穴建物

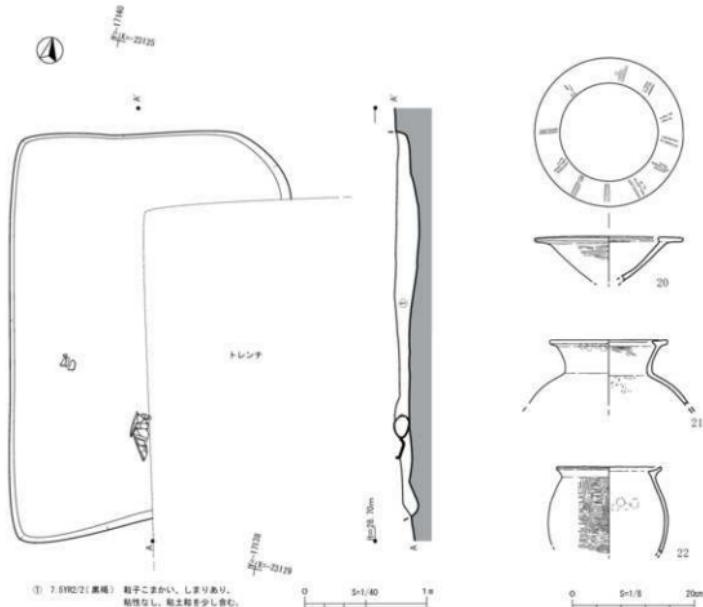
竪穴建物 01【S05】(第15図、図版4・8)

E・F-4グリッドで確認した竪穴建物である。規模は、東西2.32m、南北3.36m、深さ0.2mのやや南北に長い方形をしている。床面積は7.80m²である。炉跡や硬化面、柱穴等は確認されなかった。埋土は、1層からなる。埋土中から、高坏・煮・甕が出土している。

20は、高坏である。口縁部上面に3本一組の浅い弦線を施す。21は、煮形土器である。口縁部は鋸先形を呈する。22は、甕形土器である。口縁部は内側に内傾し、上面がへこんでいる。口唇部は平らに面取りされている。外面全体に丁寧なミガキが施され、胸部上位に暗文がみられる。

竪穴建物 02【S04】(第16図、図版4)

D・E-4グリッドで確認したカマド付竪穴建物である。規模は、東西3.64m、南北3.72m、深さ0.08mである。北側が搅乱により切られているため全体形は不明であるが、残存部から判断し平面方形、床面積約14m²程度と考えられる。柱穴と思われる小穴を1基確認したが、本来は4本柱であったと考えられる。その他、カマド右脇から貯蔵用もしくは土器置用と考えられる小穴を1基確認した。いずれも埋土は1層から



第15図 竪穴建物01 (S05) 遺構図及び遺物実測図

なる。また、建物の中央部で硬化面を検出した。カマドは建物の東壁に沿って造られている。残存状況が悪くカマドの構造は判然としないが、東西0.56m、南北1.08mの範囲に粘土が散乱していた。煙道は建物内にあると考えられる。当遺構からは土師器片等が出土しているが、いずれも小片のため図化していない。

5 土葬墓

土葬墓01【S13】(第17図、図版4・8)

H-4グリッドで確認した土葬墓である。長軸(南北)1.32m、短軸(東西)0.96m、深さ約0.24mの平面方形で、墓坑底は平坦である。また、墓坑北側から黒色土器が1点出土している。黒色土器の出土位置及び墓坑幅が南側より北側の方が20cm程度幅広であることから、被葬者は頭を北にして葬られたと考えられる。また、長軸(南北)が1.32mと短いことから屈葬された可能性もある。

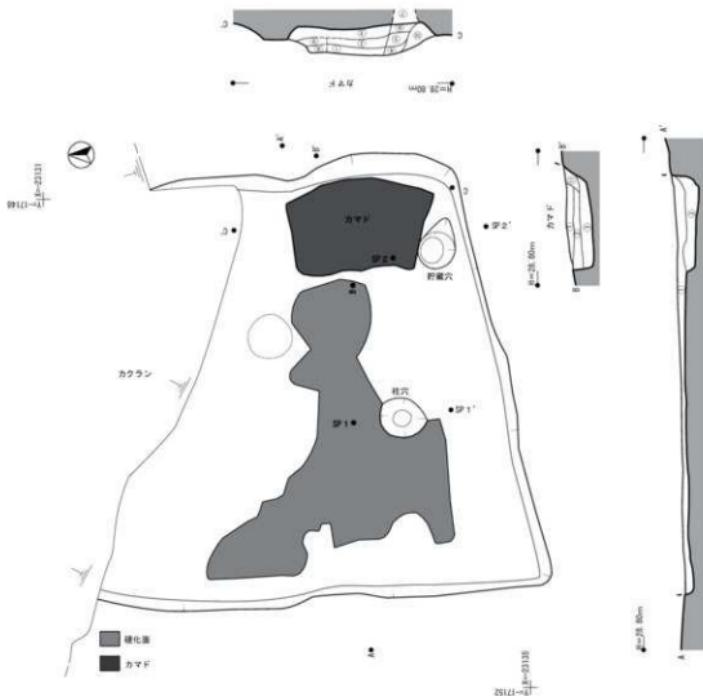
23は、内黒(A類)の黒色土器である。調整は外表面は回転ヘラケズリ後回転ヘラミガキ、内面はいぶし焼による黒化処理の後ヘラミガキが施される。また、底部内面には押し出し技法がみられる。

6 溝

溝01【S12】(第18図、図版4)

C-D-3・4・5・6グリッドで確認した南北方向に走る溝である。幅(東西)2.2m、底面幅0.8m、深さ0.3m~0.9mの逆台形をしている。検出した溝の長さは25.6mであるが、南北の調査区外にそれぞれ延伸しており、その規模は不明である。溝は、南側ほど浅くなっている。土層観察の結果、溝は2回程度掘り直しを行っており、それに伴い深さが浅くなっている。溝底面のレベルは、標高27.88m~28.34mで凹凸となることから区画溝と考えられるが、東西どちら側に対しての区画であったのかは明確ではない。

当遺構からは、土師器・青磁・天目等が出土しているが、いずれも小片であるため図化していない。



① 7.1992/2(基壇) 鈍子こまかい、ややしまる。粘性なし。クロニガブロックをわずかに含む。
② 7.1992/2(基壇) 鈍子こまかい、ややしまる。粘性なし。粘土鉢をわずかに含む。カマド掘方埋土。

カマド:

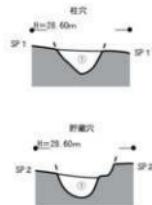
- ① 10/92/4(堆積) 鈍子こまかい、かたくしまる。粘性なし。粘土鉢をごくわずかに含む。
- ② 10/92/3(基壇) 鈍子こまかい、いたくしまる。粘性なし。1mm程度の粘土鉢をわずかに含む。
- ③ 10/92/3(基壇) 鈍子こまかい、いたくしまる。粘性なし。1mm以下の粘土ブロックをごくわずかに含む。

カマド掘方埋土:

- ④ 10/94/6(堆積) 鈍子こまかい、かたくしまる。粘性なし。粘土鉢、粘土鉢をごくわずかに含む。
- ⑤ 10/92/2(基壇) 鈍子こまかい、しまりあり。粘性なし。2mm程度の粘土鉢を含む。
- ⑥ 10/92/2(基壇) 鈍子こまかい、しまりあり。粘性なし。1mm程度の粘土鉢を少し含む。
- ⑦ 10/92/2(基壇) 鈍子こまかい、しまりあり。粘性なし。1~2mm程度の粘土鉢を少し含む。
- ⑧ 10/93/4(堆積) 鈍子こまかい、しまりあり。粘性なし。1~3mm程度の粘土鉢を少し含む。
- ⑨ 10/92/3(基壇) 鈍子こまかい、しまりあり。粘性なし。1mm以下の粘土鉢をごくわずかに含む。
- ⑩ 10/92/2(基壇) 鈍子こまかい、ややしまる。粘性なし。1mm程度の粘土ブロック、粘土鉢をわずかに含む。堆積。

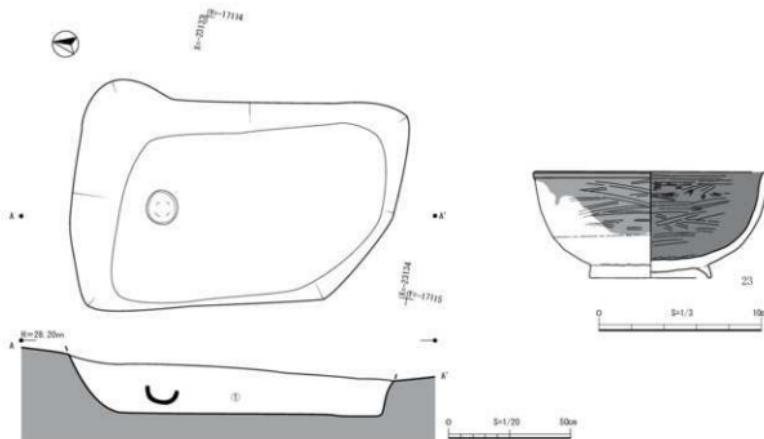
柱穴・貯藏穴:

- ⑪ 10/92/4(堆積) 鈍子こまかい、しまりあり。粘性なし。

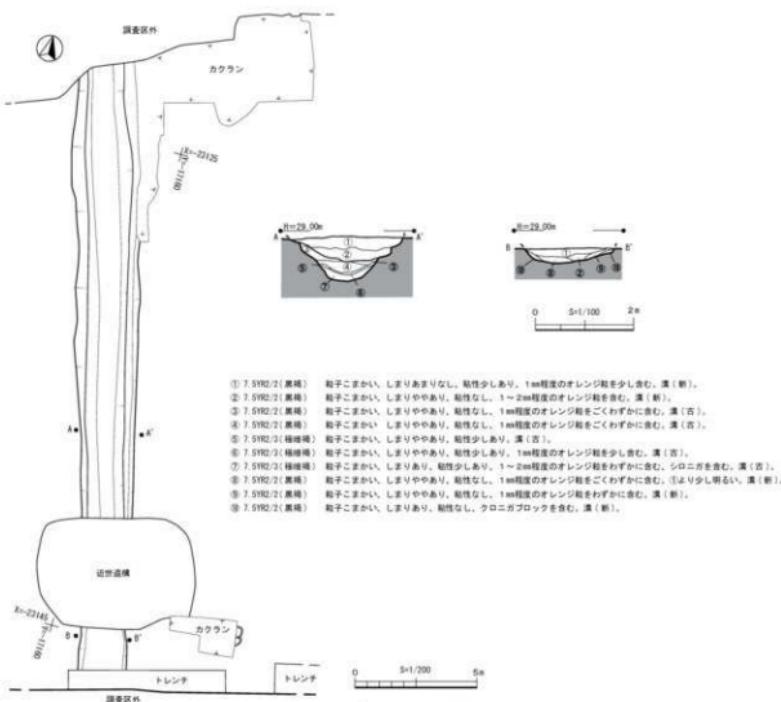


0 50 100

第 16 図 竪穴建物 02 (S04) 造構図



第17図 土葬墓01(S13) 造構図及び遺物実測図



第18図 溝01(S12) 造構図

第3表 遺物観察表

遺物番号	種別番号	因版番号	遺構名	遺構番号	出土地点	出土位置	器種	器形	型式 ^①	法量 ^② (cm)				焼成	残存度
										口径	器高	幅径	底径		
1	5	5	埋設土器遺構01	S08	F-5	埋土①	講文土器	深鉢	天城式	(41.8)	現 55.7	49.0	—	良	ほぼ完形
2	6		埋棺墓01	S16	F+G-2	埋土①	弥生土器	甕(下甕)	汲田式(KⅡc式)	(71.8)	現 88.3	(70.6)	(12.0)	良	1/2以上
3			埋棺墓02	S20	G-2	埋土①	弥生土器	甕(上甕)	汲田式(KⅡc式)	—	現 45.6	(54.0)	—	良	1/6
4	7		埋棺墓02	S20	G-2	埋土①	弥生土器	甕(下甕)	汲田式(KⅡc式)	(66.6)	現 87.3	(63.0)	11.2	良	1/2以上
5		6	埋棺墓03	S10	F-3	埋土①	弥生土器	甕(下甕)	汲田式(KⅡc式)	—	現 59.8	(53.6)	(10.6)	良	約1/4
6	8		埋棺墓04	S17	G-2	埋土①	弥生土器	甕(上甕)	黑髮II式	—	現 42.5	(44.4)	—	良	1/4
7			埋棺墓04	S17	G-2	埋土①	弥生土器	甕(下甕)	黑髮II式	45.9	現 73.8	46.4	—	良	ほぼ完形
8	9		埋棺墓05	S09	F-3	埋土①	弥生土器	甕(下甕)	黑髮II式	—	現 67.9	(45.0)	(7.7)	良	約1/2
9			埋棺墓06	S02	H-5	埋土①	弥生土器	甕(上甕)	黑髮I式	36.8	現 25.2	(35.8)	—	良	1/2未満 口縁ほぼ完形
10	10		埋棺墓06	S02	H-5	埋土①	弥生土器	甕(下甕)	黑髮II式	(45.2)	67.0	(45.0)	7.4	良	ほぼ完形
11		7	埋棺墓07	S03	H-4	埋土②	弥生土器	鉢(上甕)	黑髮II式	(30.2)	現 14.6	—	—	良	1/2未満
12			埋棺墓07	S03	H-4	埋土②	弥生土器	甕(下甕)	城ノ越系	—	現 64.3	(51.6)	7.6	良	1/2以上
13			埋棺墓08	S19	E-3	埋土①	弥生土器	甕(下甕)	黑髮III式	—	現 76.0	61.6	(8.9)	良	ほぼ完形
14			埋棺墓08	S19	E-3	埋土①	弥生土器	甕	—	(16.6)	25.4	(18.8)	(5.0)	良	口縁1/2 脇～底部1/10
15	12		埋棺墓09	S18	E-3	埋土①	弥生土器	甕(下甕)	黑髮III式	36.6	79.5	55.9	8.0	良	ほぼ完形
16			埋棺墓10	S06	F-4	埋土②③	弥生土器	甕(下甕)	黑髮IV式	(28.3)	61.5	47.5	(10.1)	良	ほぼ完形
17		8	埋棺墓11	S69	G-4	H層	弥生土器	甕(下甕)	汲田式(KⅡc式)	—	現 44.4	(66.4)	—	良	1/8
18			埋棺墓12	S68	G-2	H層	弥生土器	甕(下甕)	黑髮II式	—	現 53.2	(48.6)	—	良	1/4
19			埋棺墓13	S15	F-5	H層	弥生土器	甕(下甕)	黑髮IV式	23.8	現 17.7	(28.8)	—	良	1/2未満 口縁ほぼ完形
20			堅穴建物01	S05	E+F-4	埋土①	弥生土器	高壙	黑髮III式	24.3	現 7.4	—	—	良	壙部ほぼ完形
21			堅穴建物01	S05	E+F-4	埋土①	弥生土器	甕	—	19.3	現 10.7	—	—	やや良	口縁～脇部1/5
22			堅穴建物01	S05	E+F-4	埋土①	弥生土器	甕	—	17.0	現 14.2	19.6	—	良	口縁～脇部1/2
23	17	17	土葬墓01	S13	H-4	埋土①	黒色土器	甕	内黒(A類)	14.5	6.5	—	7.5	良	完形

※1 土器型式は、主に橋口達也 2005『東北と弥生時代年代論』雄山閣と西健一郎 1983『黒髮式土器の基礎的研究』『古文化叢書』第12集 九州古文化研究会を参考にした。

※2 「現」は残存値、()は復元値。

地土	色調		調整		備考	造物番号
	外面	内面	外面	内面		
角閃石、白色粒子、黒色粒子、石英、雲母	灰黄褐 (10YR5/2)	浅黄 (2.5Y7/4)	ヘラミガキ、ナデ 口縁部	ヘラミガキ		1
石英、石、黒色粒子、白色粒子	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	ナデ、ハケメ	ナデ（剥離の為不明瞭）		2
石英、白色砂粒	明赤褐 (2.5YR5/6)	橙 (7.5Y7/6)	ナデ	ナデ		3
白色粒子	橙 (5YR6/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	ナデ	ナデ	黒斑あり	4
白色粒子	赤褐 (5YR4/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	ハケメ、ナデ (摩耗の為不明瞭)	ユビオサエ (剥離の為不明瞭)		5
石英、黒色粒子、白色粒子	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	ハケメ	ハケメ	黒斑あり	6
白色粒子、石英	にぶい黄 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ後ナデ消し、 ユビオサエ		7
石英、雲母、白色粒子	にぶい黄 (10YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/4)	ナデ、ハケメ、 ユビオサエ	ハケメ後ナデ、 ユビオサエ	黒斑あり	8
白色粒子、黒色粒子、角閃石	浅黄 (2.5Y7/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	ナデ、ハケメ	ナデ	黒斑あり	9
白色粒子、長石、石英	にぶい黄 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	ハケメ、ナデ、 ユビオサエ	ハケメ、ユビオサエ、 ハケメ後ナデ消し、ナデ	黒斑あり	10
白色粒子、黒色粒子、褐色粒子、長石	にぶい黄 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	ナデ	ナデ、ハケメ	黒斑あり	11
雲母、角閃石、石英	明褐 (7.5YR5/8)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	ミガキ、ナデ	ナデ、ユビオサエ	黒斑あり 口縁部打ち欠き	12
黒色砂粒、白色砂粒	にぶい黄 (10YR7/4)	明赤褐 (2.5YR5/6)	ナデ、ヘラミガキ、 ハケメ後ヘラミガキ、 暗文（胴部上位）	ハケメ、ナデ、 ハケメ後ナデ	刻目突帯 黒斑あり 口縁部打ち欠き	13
黒色粒子	橙 (2.5YR6/8)	橙 (2.5YR6/8)	ナデ	ナデ（摩耗の為不明瞭）	櫻松墓 08 棚内出土	14
石英、角閃石、白色粒子、黒色粒子	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐灰 (7.5YR6/1)	ヘラミガキ、 ナデ、ハケメ、 暗文（口縁部）	ナデ（剥離の為不明瞭）		15
角閃石、石英	橙 (2.5YR6/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	ヘラミガキ、 ナデ後ヘラミガキ	ナデ	黒斑あり	16
白色砂粒、石英、金雲母	橙 (5YR5/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	ナデ、ハケメ後ナデ	ナデ	胴部に一部赤色顔料 領は遺物番号2をもとに復元	17
白色砂粒	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	ハケメ後ナデ	ナデ	下半部一部焼成により赤変	18
長石、白色粒子、黒色粒子、褐色粒子	橙 (5YR5/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	ナデ、ミガキ、 暗文（口縁部）	ミガキ、ナデ、 ユビオサエ	刻目突帯 黒斑あり	19
黒色粒子、白色礫	橙 (2.5YR6/8)	橙 (2.5YR6/8)	ナデ、ハケ後ナデ	ナデ後浅い沈線 (口縁部上面)		20
織	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	ナデ、 ユビオサエ後ナデ	ハケメ後ナデ		21
黒色粒子	明赤褐色 (5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	ナデ、 ヘラケズリ後ミガキ、 暗文（胴部上位）	ナデ		22
白色織、黒色粒子	浅黄橙 (7.5YR8/4)	黒 (5Y2/1)	ヨコナデ、 回転ヘラケズリ後 回転ヘラミガキ、 高台貼付後回転ナデ	手持ちヘラミガキ	底部押し出し技法	23

第4章 総括

第1節 調査の成果

宮園A遺跡第1次発掘調査区がある役場跡地周辺では、昭和35年（1960年）頃の開発で甕棺と人骨が確認されており、「宮園の甕棺群」として益城町誌に記載されている。しかしながら、甕棺等が確認された当時は本格的な調査が行われなかったため、本遺跡は広がりや性格が分からぬまぼろしの遺跡とされた。今回の調査は、甕棺等の発見から約60年の歳月を経て当該地ではじめて実施された発掘調査である。後世の削平や擾乱を受けていたものの、調査ではまぼろしの遺跡といわれるきっかけとなった甕棺墓群をはじめ縄文時代、弥生時代、古代、中世に属する遺構が確認され、宮園A遺跡周辺では縄文時代から現在に至るまで古墳時代を除いて連続と人々の営みが繰り返されてきたことが明らかとなつた。以下、今回の調査成果と今後の課題について甕棺墓群を中心にまとめる。

1 甕棺墓群

甕棺墓群が造られた時期 甕棺墓は、調査区東半部（E・F・G・H-2・3・4・5グリッド）から13基検出された。今回の調査区は東が高く西に向て緩やかに傾斜している。また、調査区の東側は浅い谷筋となっており、現在は県道235号線が南北に走っている。甕棺墓は調査区内でも標高が高い東側に集中して検出された。

今回の調査区は、地震で被災した役場庁舎が昭和55年（1980年）に建設されるまで木造の旧庁舎が建っており、その後地震が起きるまで役場駐車場として利用されてきた。そのため、調査区は庁舎建設等に伴つて大きな削平を受けており、今回検出した甕棺墓の大半は墓坑上半部が失われていた。また、棺内は土で埋まっており、人骨や副葬品は検出されなかつた。甕棺の土器型式から年代を検討すると、各墓に埋納された甕棺は汲田式（K II c式（橋口2005））と黒髪I～IV式（西1983）で構成されており、宮園A遺跡第1次調査で検出された甕棺墓群は弥生時代中期葉から後葉にかけて造られたと考えられる。また、今回検出された甕棺墓13基はすべてが切り合つことなく単独で造られており、先に造られた甕棺墓の存在が認識できる程度の時間幅で次の墓が造られ、墓域が形成されていったと考えられる。

甕棺墓群の広がり ここで、土器型式をもとに甕棺墓が造られた順番を検討する。甕棺墓は、はじめに黒髪I式・II式の合口棺を埋納した甕棺墓06及び黒髪II式・城ノ越系の合口棺を埋納した甕棺墓07が調査区南東端に造られ、次いで調査区北東部に汲田式（K II c式）甕棺を埋納した甕棺墓01・02・03・11及び黒髪II式甕棺を埋納した甕棺墓04・05・12、その西側に黒髪III式甕棺を埋納した甕棺墓08・09、そして最後に調査区中央や東側に黒髪IV式甕棺を埋納した甕棺10・13が造られたと考えられる。

つまり、甕棺墓は標高が高い調査区東側の谷筋に沿つて造られはじめ、そこから反時計を描くように西側に範囲を広げながら造られていったと考えられる。

また、はじめに東側に造られた甕棺墓が2基の壺形土器を組み合わせた合口棺（甕棺墓02・04・06・07）を主体としているのに対し、あとから西側に造られた甕棺墓は壺形土器の单棺で蓋も持たない（甕棺墓08・09・10・13）という違いがある。これは時期が下るにつれて、合口棺から单棺に変化するとともに甕棺の形式も壺形土器から壺形土器に変化したことを示している。

さらに、調査では甕棺墓2～3基からなるグループを4群確認した。各グループは、①黒髪I式・II式の合口棺と黒髪II式・城ノ越系の合口棺からなるもの1グループ（甕棺墓06・07）、②汲田式（K II c式）甕棺と黒髪II式甕棺からなるもの2グループ（甕棺墓02・04・12、甕棺墓03・05）、③黒髪III式甕棺からなるもの1グループ（甕棺墓08・09）で構成されている。同一グループの甕棺には時期差がみられないことから、それぞれのグループは家族単位等比較的短い期間に形成されたと考えられる。

そのほか、甕棺墓群に関連する遺構として調査区中央や東側（E・F・4グリッド）から堅穴建物01を検出した。堅穴建物から出土した高环や壺、甕から弥生時代中期後半のものとみられ、甕棺墓群と同時に存在したと考えられる。堅穴建物が甕棺墓域内に1棟のみ存在していることや建物内から祭祀用と考えられる高环等の土器が出土していることから、当遺構は墓に関係する施設であった可能性が考えられる。

甕棺墓群の構造 先述したように今回検出した甕棺墓は、後世の削平により墓坑上半が失われているものがほとんどであった。そのため、新南部遺跡群11次調査（宮本編2016）で確認されたような標石は確認さ

れていない。しかし、甕棺墓 08 は 2 段、甕棺墓 09 は 3 段の墓坑構造であることが確認でき、墓坑下半部が残る甕棺墓からは棺を埋納した墓坑の掘方を観察することが可能である。墓坑下半部の掘方に注目すると、宮園 A 遺跡第 1 次調査で検出した甕棺墓の墓坑下半部の掘方には 2 種類のタイプがあることが分かる。まず 1 つ目は、墓坑の一方の壁を傾斜が緩やかになるように掘り、その緩斜面に沿わせるように甕棺を埋納するタイプである。このタイプは甕棺墓 01・02・03・04・07・08・10 で確認でき、今回の調査で墓坑下半部の掘方が確認できた甕棺墓 9 基のうち 78% がこのタイプにあたる。2 つ目は、墓坑の一方の壁をオーバーハングするように斜めに掘り込み、墓坑壁にできた横穴にはめ込むように甕棺を埋納するタイプである。このタイプは甕棺墓 05・09 で確認でき、中型の甕棺に用いられている。この 2 つの墓坑下半部掘方タイプに時期差はみられず、埋設軸や埋設角度にも関係がない。また、先に触れたグループ内でも異なるタイプが共存しており、墓坑下半部掘方の違いが何を示すのかは今後の課題である。

甕棺口縁部の欠損 今回検出した甕棺墓のうち甕棺墓 07 及び 08 の下廻に用いられた蓋形土器の口縁部は故意に打ち欠かされたと考えられる。口縁部が打ち欠かされた甕棺は、新南部遺跡群 11 次調査でも確認されている。新南部遺跡群 11 次調査 3 号甕棺墓の場合、口縁部が打ち欠かされていたのは上廻で、その口縁部は同じ調査区内で検出され接合している。また、口縁部内面の突起部分が打ち欠いてあったことから、口縁部を打ち欠く行為は墓域で行われたと想定し、この打ち欠く行為が祭祀行為であった可能性を指摘している（宮本編 2016）。宮園 A 遺跡第 1 次調査の場合、口縁部が打ち欠かされていたのは下廻で、打ち欠かされた口縁部片も調査区内から確認されていないなど新南部遺跡群 11 次調査とは異なる点もあるが、この行為は何からの祭祀行為として行われた可能性が想定される。ただ、口縁部が打ち欠かされたのが上廻ではなく下廻であるという点を踏まえると単に遺体を棺内に安置しやすくなるため又は上廻と下廻を組合せやすくするために行われた可能性も考えておきたい。

2 その他の遺構

埋設土器遺構 埋設土器遺構は、調査区中央部南東側（F - 5 グリッド）から検出された。黒色磨研土器を垂直に埋設している。埋設された土器は天城式の深鉢形土器で繩文時代後期末と考えられる。埋設土器遺構については、墓または貯蔵穴としての用途が推定されているが、当遺構では深鉢に伴うような蓋や土器内部出土の遺物がなく、その性格は不明である。

周溝状遺構 周溝状遺構は、調査区西側（A・B - 4・5・6 グリッド）から 2 基検出されたが、いずれも大きく削平を受けていた。また、当遺構からは遺物がほとんど出土しておらず、遺構中央部や周溝内部に小穴等の遺構も認められない。ここで当遺構の時期や性格を考えるため周溝状遺構に関する近年の研究に目を向けてみると、周溝状遺構の分布や時期については一定の見解が見出されている。まず、分布については、九州・四国・近畿・北陸・関東で確認されており、全国的に分布が広がる可能性が高いとされる。九州では北部九州に多く認められ、県内でも大辻遺跡（益城町）をはじめ石の本遺跡（熊本市）や狩尾遺跡群（阿蘇市）などから 50 基を超える事例が報告されている。また、時期については弥生時代中期から後期とされる。一方で遺構の性格については、祭祀遺構ととらえる見方が多く、中には炭化米や稻由来のプランクトンオバール検出、高床倉庫との併置などから稻と関連した祭祀遺構ととらえる見方もある（浜崎 2014）。そのほか、倉庫ないし作業場としての機能を持った施設とする見方（西嶋・渕内 2015）などもある。

これら研究成果と遺構埋土の状況等から宮園 A 遺跡第 1 次調査で検出した周溝状遺構も弥生時代に属すると考えられる。しかし、その性格については今回の調査でその根据となるような遺物は確認されておらず、高床倉庫や竪穴建物との併置も確認できないことから、現状で言及することは難しい。

カマド付竪穴建物 調査区中央部（D・E - 4 グリッド）からカマド付竪穴建物が検出されたが、遺物もほとんど出土していないため時期は判然としない。ただ、建物の規模等から 9 世紀から 10 世紀ごろと考えられる。

土葬墓と溝 土葬墓は、調査区南東部（H - 4 グリッド）から検出された。墓坑北側から 11 世紀頃と考えられる内黒の黒色土器（A 類）碗が出土している。また、溝は調査区中央付近（C・D - 3・4・5・6 グリッド）から検出された。溝は南北に走る区画溝と考えられるが、その規模や東西どちら側に対しての区画であったかは不明である。出土した土器片から 12 世紀から 14 世紀頃を中心に機能し、2 回程度の掘り直しを経て、近世にいたって埋没したと考えられる。

第2節 今後の課題

木山川流域における甕棺墓の展開 宮園A遺跡が位置する木山川流域では八反田遺跡・平田遺跡（益城町）や上官塚遺跡（嘉島町）などをはじめとして甕棺墓が確認された遺跡が点在しており、それら遺跡との関連性や木山川流域や九州中部における甕棺墓の展開について今後検討を加えていければと考えている。

弥生時代集落域の解明 また、今回の発掘調査では甕棺墓群の広がりを確認することができたものの、同時期の集落域を確認することはできなかった。あわせて、周溝状遺構の性格も明らかにできなかった。ただ、周溝状遺構が集落の縁辺部に位置するという指摘（亀田編 2019）を踏まえると、宮園A遺跡の場合、今回の調査区よりさらに西側に集落域が広がっている可能性が考えられる。今後、調査成果の蓄積を待ち集落域から墓域までを含めた高遊原台地・託麻台地南縁辺部における弥生時代の様相を明らかにしていきたい。

中世における木山地域の様相 そして中世に目を向けると、今回の調査で溝から出土した土器片は小片ではあるものの龍泉窯の青磁片や白磁片、天目片など階級の高さを想定させるようなものが出土している。宮園A遺跡周辺には台地部をおおいた平野部の木山川流域に条里跡が広がる。また、時期は少しちだるもの、二町四方という広大な規模を誇った中世道安寺跡が位置する。今回の調査により当該地は10基を超える甕棺墓が確認された弥生時代に人々の活動が活発だったと考えられるが、溝出土の土器片や周辺の遺跡の存在から中世にも人々の営みが活発であった可能性が考えられる。今回の調査では、溝の一端と土葬墓1基を確認したに過ぎず、周辺域の調査例も含めた検討を行っていきたい。

最後に、宮園A遺跡第1次発掘調査は、調整から予備調査、発掘調査に至るまで平成28年熊本地震からの復旧・復興事業に伴い他自治体から派遣された職員の支援を受けて実施した。震災後の混乱が残る中、御尽力いただいた派遣職員の方々に厚く御礼申し上げる。

【主要参考文献】

- 緒方 勉 1978「付論Ⅰ 黒髪式土器群考—甕形土器の底部変化をもとにして」『谷須遺跡 谷須遺跡調査』 pp.70-79
宮本 大編 2016『新南部遺跡群（10次・11次）古原遺跡』熊本県文化財調査報告第320集 熊本県教育委員会
亀田 学編 2001『梅ノ木遺跡II上巻』熊本県文化財調査報告書第199集 熊本県教育委員会
亀田 学編 2001『梅ノ木遺跡II下巻』熊本県文化財調査報告書第199集 熊本県教育委員会
亀田 学編 2019『立石遺跡群』熊本県文化財調査報告書第335集 熊本県教育委員会
新熊本市史編纂委員会 1998『新熊本市史』第1巻 自然・原始・古代 熊本市
佐原 真 1983『弥生土器I』 ニュー・サイエンス社
島津義昭 1989「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』4 小学館 pp.315-317
島津義昭編 1977『熊本県の条里』熊本県文化財調査報告第25集 熊本県教育委員会
武末純一 2002「第1章 九州地方の土器」「考古資料大観」第1巻 弥生時代・古墳時代土器I 小学館 pp.101-112
中世土器研究会編 1994『概説 中世土器・陶磁器』有限会社真陽社
中園 啓 1996「弥生時代中期土器様式の並行関係—須玖II式期の九州・瀬戸内ー」『史蹟』133編 九州大学文学部 pp.33-53
西 健一郎 1983「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化叢書』第12集 九州古文化研究会 pp.77-104
西 健一郎 1982「熊本県における弥生時代中期甕棺編年の子孫」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』 森貞次郎博士古希記念論文集刊行会 pp.445-469
西崎剛広編 2015『中須遺跡』宮崎市文化財調査報告書第102集 宮崎市教育委員会
橋口達也 2005『甕棺と弥生時代後編』 雄山閣
浜崎悟司 2014「弥生時代後期の「周溝」～稲の屋外積みについて～」『石川県埋蔵文化財情報』第32集 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター pp.27-38
益城町史編さん委員会編 1989『益城町史』通史編 益城町
木ノ江和同 1997「北部九州の縄紋後・晚期土器一三万田式から刻目突帯文土器の直前までー」『縄文時代』第8号 縄文時代文化研究会 pp.73-101
美濃口雅朋 1994「熊本県における中世前期の土器について」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会 pp.119-148
宮崎亮一編 2000『太宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会
宮地聰一郎 2008「黒色磨研土器」『絶覧 縄文土器』小林達雄先生古希記念企画 アム・プロモーション pp.790-797

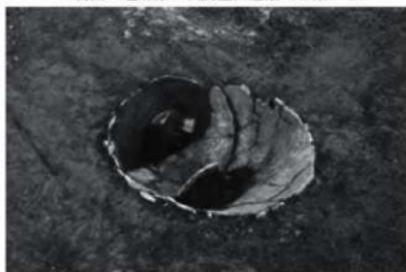
写真図版



1. 宮園 A 遺跡第 1 次調査区遠景（北東から）



2. 埋設土器遺構 01 (S08) 遺物検出状況（西から）



3. 壱棺墓 01 (S16) 壱棺検出状況（西から）



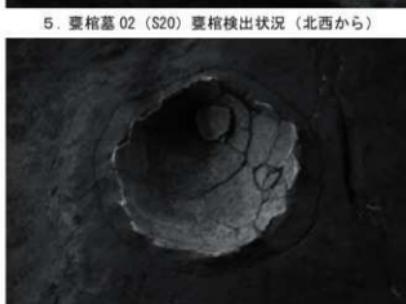
4. 壱棺墓 01 (S16) 完掘状況（南西から）



5. 壱棺墓 02 (S20) 壱棺検出状況（北西から）



6. 壱棺墓 02 (S20) 完掘状況（北西から）



7. 壱棺墓 03 (S10) 壱棺検出状況（北東から）



8. 壱棺墓 03 (S10) 完掘状況（北東から）

図版2



1. 壱棺墓 04 (S17) 壱棺検出状況（東から）



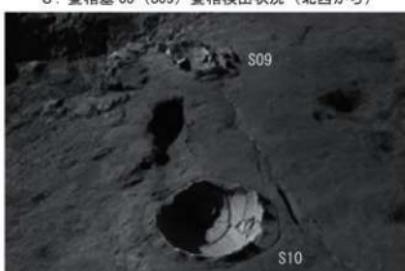
2. 壱棺墓 04 (S17) 完掘状況（北から）



3. 壱棺墓 05 (S09) 壱棺検出状況（北西から）



4. 壱棺墓 05 (S09) 完掘状況（北西から）



5. 壱棺墓 03 (S10)・05 (S09) 検出状況（東から）



6. 壱棺墓 06 (S02) 壱棺検出状況（北西から）



7. 壱棺墓 07 (S03) 壱棺検出状況（南西から）



8. 壱棺墓 08 (S19)・09 (S18) 検出状況（東から）



1. 壱棺墓 08 (S19) 壱棺検出状況（東から）



2. 壱棺墓 08 (S19) 埋納状況（西から）



3. 壱棺墓 08 (S19) 完掘状況（東から）



4. 壱棺墓 09 (S18) 壱棺検出状況（東から）



5. 壱棺墓 09 (S18) 土層断面（北から）



6. 壱棺墓 09 (S18) 完掘状況（東から）



7. 壱棺墓 10 (S06) 壱棺検出状況（北西から）



8. 壱棺墓 10 (S06) 完掘状況（南から）

図版4



1. 周溝状遺構 01 (S01) 完掘状況 (北東から)



2. 周溝状遺構 02 (S07) 完掘状況 (西から)



3. 竪穴建物 01 (S05) 完掘状況 (東から)



4. 竪穴建物 02 (S04) 完掘状況 (西から)



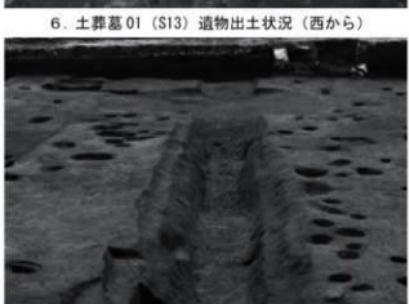
5. 土葬墓 01 (S13) 土層断面 (西から)



6. 土葬墓 01 (S13) 遺物出土状況 (西から)



7. 溝 01 (S12) 土層断面 (南から)



8. 溝 01 (S12) 完掘状況 (北から)



1



3

1. 埋設土器遺構 01 (S08) 出土遺物

3. 豐棺墓 02 (S20) 出土遺物①



2

2. 豐棺墓 01 (S16) 出土遺物



4

4. 豐棺墓 02 (S20) 出土遺物②



5

1. 壶棺墓 03 (S10) 出土遗物



8

4. 壶棺墓 05 (S09) 出土遗物



6

2. 壶棺墓 04 (S17) 出土遗物①



9

5. 壶棺墓 06 (S02) 出土遗物①



7

3. 壶棺墓 04 (S17) 出土遗物②



10

6. 壶棺墓 06 (S02) 出土遗物②



1. 壶棺墓 07 (S03) 出土遗物①



3. 壶棺墓 08 (S19) 出土遗物①



12

2. 壶棺墓 07 (S03) 出土遗物②



13

4. 壶棺墓 08 (S19) 出土遗物②



15

5. 壶棺墓 09 (S18) 出土遗物



16

6. 壶棺墓 10 (S06) 出土遗物

图版 8



17



18

1. 壶棺墓 11 (S69) 出土遗物



19

3. 壶棺墓 13 (S15) 出土遗物



20

6. 竖穴建物 01 (S05) 出土遗物③



21

4. 竖穴建物 01 (S05) 出土遗物①



22

5. 竖穴建物 01 (S05) 出土遗物②



23

7. 土葬墓 01 (S13) 出土遗物

報告書抄録

ふりがな	みやぞの Aいせき						
書名	宮園A遺跡1						
副書名	益城中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ名	熊本県文化財調査報告						
シリーズ番号	第342集						
編著者名	木庭真由子(編) 井鍋誓之 阿比留士朗						
編集機関	熊本県教育委員会						
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号 Tel.096-333-2706						
発行年月日	令和3年(2021年)3月31日						
保管場所	熊本県文化財資料室 〒861-4215 熊本県熊本市南区城南町沈目1667 Tel.0964-28-4933						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 遺跡 番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村					
みやぞの Aいせき 宮園A遺跡 (第1次)	くまもとけんかみやしきどん 熊本県上益城郡 益城町入子宮園	43 443	020	32° 47' 28.78445"	130° 49' 00.83026"	2019.10.30 2019.12.27	2.354 m ² (土地区画整理事業)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮園A遺跡 (第1次)	包藏地	縄文時代 弥生時代 古代 中世	埋設土器遺構1 壇棺墓13 周溝状遺構2 堅穴建物2 土葬墓1 溝1	縄文土器 弥生土器 (壇棺) 黑色土器	縄文時代後期末の埋設土器遺構検出 弥生時代中期中葉から後葉の壇棺墓検出 中世の土葬墓及び溝検出

要約	今回の調査は、宮園A遺跡ではじめて行われた本格的な発掘調査で、平成28年熊本地震からの復旧・復興を目的とした土地区画整理事業に伴って実施した。調査では、調査区東半部から壇棺墓13基が検出され、弥生時代中期中葉から後葉にかけて当該地に墓域が広がっていたことが判明した。その他、埋設土器遺構や周溝状遺構、堅穴建物、土葬墓、溝が検出されており、当該地では縄文時代から連続と人々の営みが繰り返されてきたことも明らかとなった。これら成果は、これまで実態が不明だった高遊原台地・託麻台地南線辺都の様相を明らかにする上で重要である。また、宮園A遺跡が所在する木山川流域には八反田遺跡・平田遺跡(益城町)、上官塚遺跡(嘉島町)など壇棺墓が検出された遺跡が点在しており、今回の調査成果は木山川流域や熊本県内における壇棺墓の展開を検討していく上でも重要であるといえる。
----	--

本書の仕様

- 版型 A4判
- 紙版 13級 M.S明報
Adobe In DesignCS5.1 (forWindows)
- 印刷 オフセット
- 製版 本誌のモノクロ及びカラー印刷
写真は全てスクリーン段数220線で製版
- 用紙 表紙: アーチボスト紙 220 kg
見返し: 上質紙 110 kg
序文・目次等・本文・沙録・奥付: 上質紙 110 kg
大畠・巻頭カラー・写真図版: 特アート SA金葉 135 kg
- 製本 手製綴じ
- 本誌加工 PP(ポリプロピレン)貼り



宮園A遺跡第1次調査は、熊本地震からの復旧・復興のために熊本県に派遣された職員の方々の御支援を受けて実施しました。

熊本県文化財調査報告 第342集

宮園A遺跡1

—益城中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

発行年月日 令和3年(2021年)3月31日刊行

発 行 熊本県教育委員会

熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印 刷 シモダ印刷株式会社

熊本県熊本市中央区上水前寺2丁目16番16号

発行者：熊本県教育委員会
所屬：教育総務局文化課
発行年度：令和2年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 342 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：宮園 A 遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2022 年 3 月 31 日

(増刷されている場合には、以下の文章も挿入する)

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL : <http://www.kumamoto-bunho.jp/>